



求道



第十號

第二卷

(可認物便郵種三第 日六廿月二十年二卅治明)
(行發日一回一月每)行發日一月二十年八卅治明)

求道第貳卷第拾號目次

求道

◎疑城胎宮懈慢界

◎信仰餘光

信仰と律法
信仰と慚愧
信仰と奇蹟
信仰と祈禱

講話

◎眞愚は智なり

◎不可思議の信

實驗

◎不可思議の實驗によりて半生の

苦悶を脱離す

◎引接の光明

◎感謝の披瀝(消息二章)

雜錄

◎生死巖頭に立つの時

◎燈火爐火

歎咏

◎千本銀杏(連作短歌)

◎祖父の椅子(押韻新體詩)

◎異芳三章(散文詩)

時報

◎歲末の辭◎求道學會第二、第三求道會講話題

靜觀

左千夫

甲之

八風譯

每日曜午前九時

求道學會

(本郷森川町一番地)

毎土曜午後二時

第二求道會

(九段坂佛教俱樂部)

毎月第一土曜午後六時

第三求道會

(日本橋區堀切町説教所)

求道

第貳卷 第十號

疑城胎宮懈慢界

法然聖人曰く、生死之家以疑爲所止、涅槃之城以信爲能入と、眞に佛を信ずると疑ふとは生死涅槃の岐るゝ所、洵に戒心すべき也。吾人人生問題に接して實驗の信仰に入りたるもの、審かに自己の徑路を顧みるに確かに疑なるものは吾人を暗まして久しく生死海中に沈淪せしめたりしを知る。嗚呼吾人は久しく人世を疑ひたりき、社會を疑ひたりき、他人を疑ひたりき、而して遂に大に自己を疑ひたりき、而して疑惑中にあるものは自己が疑惑にあることを悟らず、却て自己に眞智ありと思惟せりき。蓋し人世を疑ひ社會を疑ひ他人を疑ひ自己を疑ふの根本は人世社會他人自己すべて此人間界に絶對無限の力存在するが如く誤認せるが故ならずや。既に人世は幸福にして吾人の意思の如く爲し得べきもの也と誤認す、故に若し人世吾人の意思の如くならざるに至りて之を疑ふ、既に社會は自由にして吾人の理想の如く爲し得べきもの也と誤認す、故に若し社會吾人の理想の如くならざるに至れば之を疑ふ、他人は無限の力ありて吾人の欲望する如く爲し得べきもの也と誤認す、故に若し他人吾人の欲望するが如くならざるに至れば之を疑ふ。而して自己に至りては絶對の智慧と力とを有して何事も爲し得べからざることなしと誤認す、此に於てや、實際上自己の力能く自己を制御する能はざるに至りて之を疑ひ終に煩悶懊惱せざることなけむ。此の如く既に頼むべからざる人間界に絶對無限の力を誤認するもの抑々懷疑苦悶の病根に非ずや、而して人間界に絶對無限の力を認むとするものは人間以外に無限大悲の不可思議力の存在するを認めざるものにして即ち佛智を疑惑するものに非ずや。此點に於ては吾人は斷言す、人生を疑ふものは結局佛陀を疑ふに原因せざるはなしと、故に若し人生を疑ふて最後に達せば遂に

人生の無力なるを悟り來りて、獨り絶對無限の佛智明瞭として吾人を照し給はざることなけん。既に一たび佛智不思議の光明に接せんか、人生何の所か大慈大悲の溢れざる所あらん、此に至りて佛智不思議を了したりと言ふべく、信樂開發すと言ふべく、終に極樂無爲涅槃界に入ることを得べし。而して是れ盡十方無碍光佛に接したるものにして光明無量壽命無量の眞實の佛陀に遇ふものと謂つべし。若し人間以外に佛陀絶對の力を認めざるものは佛智不思議を丁せざるもの也、絶對救濟の大悲を疑惑するもの也。既に絶對の力を疑ふ、故に以爲らく、我善を修すれば福あり、我罪を犯せば禍ありと、偏に自己の力を待みて奮闘到らざる所なし。是絶對の佛陀を疑ひ、自力を以て自己を局分し、自己に絶對の力あるが如く思惟するもの畢竟憍慢懈慢に基因せざるはなし。此の如き者豈極樂無爲涅槃界に入るを得んや、必ずや疑城胎宮懈慢界に止るに至らん、宜哉親鸞聖人特に化身土卷を編して親切丁寧に之を説きて相對自力の信仰を誠めたまふ。蓋し是れ古今同一の信仰問題にして遠く之を經文に折るに其意義明瞭にして聖人の時代に在りて吉水門下の人々猶此相對自力の信仰に止るもの多かりき。而して近時信仰問題復活するに及び、起り來る現象は着々として恰も聖人當時の有様と符節を合せたるが如きものあり。而して此等相對自力の信仰なるものは吾人亦絶對の信仰に入るの徑路として經驗し來れるものにして聖人亦自ら自己の經過なることを告白したまふ、洵に是れ各人が眞實の佛陀に接し、絶對の信仰に入るの方便たらずんばならず。此に於てや稱して方便化身土といふ、蓋し化身土一卷は眞實の信仰を側面より消極的に顯すもの、此一巻を得て教行信證及眞佛土卷は活躍して其絶對の光明を發揮するものと謂つべき也。

大無量壽經開顯悲化段に至りて疑城胎宮を説くの文字、頗る適切なるものあり、而して其説法に至るの順序及び光景、實に眞佛無限の光明と化佛有量の胎宮とを相對照し來りて、吾人をして歷々其境にあるの想あらしむ。曰く、佛阿難に告げたまはく、汝起て更に衣服を整へ合掌恭敬して、無量壽佛を禮し奉るべし、十方國土の諸佛如來常に共に彼佛の無著無礙なるを稱揚し讚嘆し給ふ、是に於て阿難起て衣服を整へ、正身西面し、恭敬し合掌して、五體を地に投じて無量壽佛を禮し奉り、白して言はく、願くば彼佛の安樂國土及諸の菩薩聲聞大衆を見奉らんと、是語を説き已るに、即時に無量

壽佛大光明を放て、普く一切諸佛の世界を照し給ふ、金剛圍山須彌山王大小の諸山一切の所有、皆同じく一色なり、譬へば切水の世界に彌蔓して、其中の萬物沈没して現せず、混濛浩浩汗として唯大水を見るが如し、彼佛の光明亦復是の如し、是實に盡十方無碍光佛の光明に非ずや、是十二光佛の眞相に非ずや、眞實の佛陀無量光佛に親しく接觸せるものに非ずや。而して佛と阿難との對話は此の如く進めり。曰く、

汝寧ろ復無量壽佛の大音を一切世界に宣布して衆生を化し給ふを聞き奉るや否や、阿難對て曰「唯然り既に聞奉る」。彼國の人民百千由旬の七寶の宮殿に乘して障礙あることなく、偏く十方に至て諸佛を供養す、汝復見るや否や。對て曰く「已に見奉る」。彼國の人民胎生の者あり、汝復見奉るや否や。對て曰く「已に見奉る」。其胎生の者處する所の宮殿、或は百由旬、或は五百由旬なり、各其中に於て諸の快樂を受くること忉利天上の如くにして、亦皆自然なり、

佛直ちに眞實無碍の報土を見せしめ、又邊地胎生の化土を示したまふ。是實に絶對無碍の報土に對比して、相對有量の宮殿を見せしめたまふ者、此に於てや、説話は進みて終に胎生の何者たる又何か故に胎宮に生るゝやに及べり。曰く、

爾時慈氏菩薩佛に白して言さく、何の因何の緣ありてか彼國の人民胎生化するかと、佛慈氏に告げ給はく、若し衆生ありて、疑惑の心を以て、諸の功德を修して、彼國に生れんと願せんに佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了せず、此諸智に於て疑惑して信ぜず、然れども猶罪福を信じて、善本を修習して其國に生れんと願ず、此諸衆生彼の宮殿に生して壽五百歳までに、常に佛を見奉らず、經法を聞かず、菩薩聲聞聖衆を見奉らず、是故に彼國土に於て之を胎生と謂ふ。

嗚呼此所に至りて胎生の因緣明らかとなれり。佛明らかを示して曰く、佛智不思議智不可稱智大乘廣智無等無倫最上勝智を了せず、此諸智に於て疑惑して信ぜずと。噫佛陀の不可思議力を疑ふは是根本の病根也。佛陀は絶對の救濟を下したまふ、聖人曰く本願を信ぜんには他の善も要に非ず、念佛にまさるべき善なき故に、惡をも恐るべからず。彌陀の本願を妨ぐる程の惡なきが故にと。然るに世人此彌陀の誓願不思議を疑ふ、以爲らく我善を爲さざるべからずと、是我に絶對の力ありと信するに非ずや、我

如何にして罪惡を滅せんと、是佛に滅罪の功德あることを信ぜざればなり、此に於てや、口に佛を呼ぶと雖、是中心之を信するに非ず、心に佛を念ずと雖、是自己内心の成産のみ、是に於てや彼眞實佛陀の不可思議力なるものは既に業に疑惑して信ぜざる也、乃ち勢ひ罪福因果を信じて善本を修習して自ら救ふの策を講せざるべからず、既に此の如く佛陀を律するに有量相對の見解を以てず、其結果有量相對の化土に墮在して、五百歳中遂に眞實の三寶に接する能はざる固に其所也、蓋し是れ佛陀の大悲、此疑惑の衆生を憐愍して矜哀其極に達すと雖、行者自ら疑網を以て纏する者、龍樹大士の所謂若し人善根を種へて疑へば即ち花開かざるもの是也、稱して含華未出と云ひ、胎生と云ひ、疑惑といふ、遂に之を譬ふるに七寶牢獄を以てす、經に曰く、

佛彌勤に告げ給はく、譬へば轉輪聖王の七寶の牢獄ありて種々に莊嚴し、牀張を張設し、諸の繪幡を懸けたるが如し、若し諸の王子、罪を王に得たらんに、輒ち彼獄中に囚はれて、繋くに金鎖を以てせん、佛彌勤に告げ給はく此諸の衆生亦復是の如し、佛智を疑惑するを以ての故に、彼胎宮に生れん、若し此衆生其本の罪を識りて深く自ら悔責して彼處を離るゝことを求めん、彌勤當に知るべし、其れ菩薩ありて疑惑を生ずる者は大利を失すと爲す、

蓋し人世本來牢獄あるに非ず、人生を疑ひ社會を疑ひ他人を疑ひ、遂に父母兄弟をも疑ひて之を敵視する者は遂に自ら縛するに鐵鎖を以てし、世上牢獄の人となるに至る。此の如きは根本的に佛陀を疑惑するが故に生死の家に繋縛せらるゝ者、若し佛陀を認むと雖、未だ絶對救濟の不思議力を信ぜずんば、自己が罪惡煩惱の一塊肉たるを知らずして猶善を爲し得べき能力ありと誤認す。此に於て善を爲さんことを苦勵し頭燃を拂ふが如くするも畢竟是雜善の善、虛假の行たるを免るべからず。故に自己が爲したる小善と雖、若し他人之を認めざれば心平ならず、他人之に報むざれば怒忽ち來る。此の如きの善は却て善を爲さざるよりも己を苦むるもの、自己にとりては善は是一種の桎梏にして譬ふるに金鎖を以てするもの頗る適切なりと言ふべし、而して善本を修習する久くして、最後に遂に人間相對の力の無能なるを認むるに及び、始めて夢の覺むるが如く、顧みれば久しく眞實の三寶を見る能はざりし所以のもの、自己が無力量を知らずして無限の力あるが如く思惟せし罪に坐する者也、是無限絶對の佛智不思議に對して頗る驕慢の態度を取れる者と謂つべし。此に於てや滿身慚愧の念を以て充され、懺悔自責して

明○了○に○佛○智○の○不○思○議○を○信○ぜ○ば○即○時○に○疑○城○胎○宮○懈○慢○界○は○破○壞○消○滅○し○て○直○に○極○樂○無○爲○涅○槃○界○の○絶○對○境○に○入○る○こ○と○を○得○べ○き○也○、是○即○深○自○悔○責○な○る○も○の○、七○寶○牢○獄○は○門○戸○自○か○ら○開○き○て○盡○千○方○無○碍○の○光○明○は○到○る○處○に○彌○蔓○す○る○こ○と○を○認○む○る○に○至○ら○ん、是○大○無○量○壽○經○に○於○ける○開○顯○悲○化○段○の○說○相○に○非○ず○や○。

觀無量壽經の序分、王舍城中の悲劇は洵に佛陀絶對無限の不可思議を顯はして、惡人救濟の根本的實驗を示したまふもの。釋尊說法四十餘年、法雨 普く五天に潤ひ、頻婆沙羅王、摩訶陀國に君臨して、深く佛を信じ法を弘む、提婆佛陀の教團を破壊せんことを企て、阿闍世提婆の言をさして父王を幽閉す、夫人韋提希密に食を王に進め、我子阿闍世の瞋怒を買ひ、又七重室内に幽閉せられ、愁憂憔悴して遙かに佛を禮し、法を求め、悲泣して涙雨の如し。佛乃ち目連と阿難とを隨へて自ら王宮に臨み給ふ、實に是人生悲慘の極にあらずや、實驗信仰の典型に非ずや、韋提希切實なる求道心は堤を決するが如く血涙共に披瀝せられたり。經に曰く、

韋提希佛世尊を見奉りて自ら瓔珞を絶ち身を擧げて地に投じ、號泣して佛に向て白して曰く、世尊我ひかし、何の罪ありて此惡子を生ずる、世尊復何等の因縁あつて提婆達多と共に眷屬と爲り給ふ、唯願くば世尊我が爲に廣く憂惱なき處を説たまへ、我當に往生すべし、閻浮提の濁惡世を樂はす、此濁惡の處には地獄餓鬼畜生盈滿して不善の衆多し、願くば我未來に惡聲を聞かざれ、惡人を見ざらん、今世尊に向て五拜を地に投して、哀を求め懺悔し奉る、唯願くば佛日我をして清淨業の處を觀せしめ給へと、

韋提希穢土を厭離し、淨土を欣求す、正に其極に達せり。佛之に對して如何の法を與へたまへる。曰く、

爾時世尊眉間の色を放ちたまふ、其光金色にして徧く十方無量の世界を照したまふ、還て佛の頂に住し、化して金臺と爲る、須彌山の如し、十方國土皆此中に於て現す、此の如き等の無量の諸佛の國土あり、嚴顯にして觀つべし、韋提希をして見せしめたまふ、時に韋提希佛に白して言さく、世尊是諸の佛土復清淨にして皆光明ありと雖我今極樂世界の阿彌陀佛の所に生れんことを樂ふ、唯願くば世尊我に思惟を教へ給へ、我に正受を教へ給へと、

爾時世尊即便微笑し給ふ、五色の光ありて佛の口より出つ、一一の光、頻婆娑羅の頂を照す、爾時大王幽閉に在りと雖心

眼障なくして遙かに世尊を見奉る、爾時世尊韋提希に告げ給はく、汝今知るや否や阿彌陀佛此を去ること遠からず、汝當に念を繫けて諦かに彼國の淨業成したまへる者を觀すべし、我今汝が爲に廣く衆の譬を説かん、亦未來世の一切凡夫の淨業を修せんと欲する者をして、西方極樂

國土に生ずることを得せしめんと、釋尊は口を以て説かず、眉間の光を以て親しく諸佛淨土を示し、韋提自ら絕對無碍の佛陀を選択して、其攝取を仰ぐに至りて釋尊出世の本懷をあらはし、無限大悲の救済を垂れたまふ。眞個に是れ觀經の眞髓にして親鸞聖人隱彰の義を以て此經を看破したまひしもの、信仰の活眼にあらずんば何ぞ能く此の如く沙中の玉を發見するを得ん。而して聖人の信仰眼が如何に能く文字を読み破りて無碍自在なるかを仰ぐべし、化身土卷に上記經文の眼目を指示して曰く、

彰と言ふは如來の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す、達多闍世の惡逆に緣て釋迦微笑の素懷を彰し、韋提別選の正意に因て彌陀大悲の本願を開闡す、斯乃ち此經の隱彰の義なり、是を以て經には我に清淨業處を觀せしめたまへと言へり、清淨業處とは則本願成就の報土也、我に思惟を教へ給へとは即方便也、我に正受を教へたまへと云ふは即ち金剛の眞心なり、諦かに彼國の淨業成したまへる者を觀すべしとは本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしと也、廣く衆の譬を説かんとは則十三觀是也、

佛韋提希に告げ給はく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る遠からず、汝應さに本願成就の盡十方無碍光如來を觀知すべしと、此一語直に是れ光明無量の眞相、眞實彌陀の不可思議に非ずや。而して此慈光に接する能はざるの者をして佛陀に近からしめむとするもの即定善十三觀及散善三福九品也。定善とは心を息めて心を凝すの謂、靜觀以て佛を見る事也、散善とは惡を廢して善を修するの謂、實行以て身を清むる也。蓋し吾人人類靜觀に適するものあり、實行を好むものあり、靜觀を好むものには觀想を以て極樂及び佛菩薩に接せしむ。先つ日を想ひ、水を想ひ地を想ひ樹を想ひ、此等の總てを想ひ華座を想ひ、彌陀佛を想ひ、

光明を想ひ觀音勢至を想ふ。實行を好むものは各其能力に従て品位あり、上品は上根の人、中品は普通人間の道徳を守れるの人、下品は罪惡深重の人、而して各品亦三位に分つが故に此に九品の別を生ず、若し詳かに分別せば百千無數の階級を生ずべし。此の如く定善の人は自己内觀の佛を假想して之を樂み、散善の人は各人實行の理想を追ふて苦勵に至る所なし、是何れも眞實絕對の佛陀を見る能はずして自己が假理想を以て相對有量の佛陀を形作るものたらざらざる也。故に彼定善觀念中に現する所の佛陀は長短方圓の形像を現じ、青黃赤白黒の色身を示すものにして詩的形容に涉り、相對有量に陥り、大念には大佛を見小念には小佛を見るもの之を稱して化佛といふ。又彼散善九品の往生は其實行に隨ひて階級を異にせるもの、畢竟其修行の如何によりて淨土に區別を生じ、殊に其臨終に化現せる佛陀に區別を生ず、是即ち化土也、而して此化佛化土は即ち疑城胎宮懈慢界にして畢竟自から不可思議光佛を仰がずして自己所造の佛を仰ぎ、無量光明土を局分して強て品位階次を作るもの、憐ますんばあらざる也、是實に觀經の顯說にして經に所謂思惟と云ひ、衆譬と云ふもの即是也、

然れども此の如き定善と散善とは釋尊無意義に之を説きたまふに非ず、皆人をして眞實の佛陀に接せしむるの手段なり、故に若し色光示現の佛陀を拜すと雖、若し直ちに佛陀の不可思議の境界を信樂せば眼見、耳聞即ち是れ信仰にして一點疑惑を存せざるに至らむ、第七華座觀に空中に住立したまひし無量壽佛及二大士の如き光明熾盛にして言語比興の及ぶ能はざる所、韋提希夫人見奉りて忽ち苦惱を除き佛力を信するに至る、若又口稱苦勵の念佛を修すると雖、若し之が爲に不可稱不可説不可思議の功徳、偉大なることを信樂するに至らば知らず識らずの間他力の大行に入らん、下品下生の人、心に佛を念する能はず、唯善友の勸に隨ひて十聲稱佛の時頓に佛力不思議の救済を感ず、蓋し定善と言ひ、散善と言ひ、本來佛陀絕對の光明、無限の大行を局分して誤りて自己の善と考ふるもの、若し之を觀し、之を行つゝあるの時忽爾として不可思議の光明たるを觀知し、不可思議の大行たるを信受せば定散二善何れも是れ眞實の信仰に入るの緣に非ずや、嗚呼定善は觀を示すの緣也、散善は行を顯すの緣也、觀は即ち信仰也行は即ち大行也、定散俱に廻へして絕對他力の信仰に入らしむ、此に於てや觀經一部表面に定散自力の諸善を説くと雖、其裏面は絕對大慈の光明彌漫せるなり、地を穿たば到る處に水を得べく、壁を穿たば何の處にも光を

得べし、定散二善何れの法か遂に最後に絶対の光明に接せざるものあるべき、蓋し定散二者は人間根機を概括せるものにして如何なる法か定散二善の中に攝せざるものやあらむ、一代八萬千の法皆此中に入らざるものなけん、故に一代佛教何れの法によるとも若し眞摯に文を求めて最後に達せば絶対の光明其奥底より赫々來らむ、故に觀經は畢竟一代佛教を卷きたるものにして觀經の隱顯あるは即一代佛教の上に隱顯ある所以也、故に聖人は一代藏經何れの文字を取り來るも畢竟絶対の佛陀、無量光佛の功德ならざるはなしと仰ぎたまふ、是實に觀經流通に至りて阿難に附屬して汝此語を持せよ此語を持つとは無量壽佛の名を持つと也と宣ひし所以にして是所謂本願成就の盡十方無碍光佛を觀知し、韋提希夫人廓然大悟して無生法忍を得たる者、觀經の眞體此點に至りて極まれりと謂ふべし。

最後に阿彌陀經に至りては既に八萬四千定散の諸行を以て少善根福德因縁なりと嫌貶して絶対佛陀の名號のみを以て絶対の大善、無限の大功德なりとして一日乃至七日一心不亂の稱名を勵む、恰も觀經の流通に連續し得べきもの也、然れども若し其功德を目的として自ら苦勵策進せば、口に絶対の佛陀を呼ぶと雖、心未だ絶対の信仰に入らずして、自己稱名の力を以て自ら救はんとするもの、猶化土の人たるを免れず、現時信仰問題に於て口に佛を叫ぶと雖眞實に佛を信するに非ずして強て自ら思考するもの、如きか是即顯の義也、然れども此の如く専ら佛名を稱しつゝあるの時不知不識の間に不可思議の佛力を信受して之に信賴する是隱彰の實義にあらずや、經に稱して執持名號といふ聖人釋して曰執の言は心堅牢にして移轉せざるに名く、持の言は不散不失に名くと、即是絕對他力の大信心也。

此の如く層々論じ來らば觀經は一切の靜觀實行の人を導きて唯一佛陀の下に導き阿彌陀經は其唯一佛陀の不可思議を絶対に信樂せしむ、故に此等の二經は畢竟表面に大經の疑城胎宮及懈慢界の往生を詳説して、裏面遂に眞實絶対の光明に導きて極樂無爲涅槃界に導き給ふ也、此の如きは確かに吾人が實驗的信仰に入るの經過にして其根本に訴るに本來佛陀の本願に第十九願あり、定散諸善の人を導き、二十の願に自力念佛の人を導けるによる者也言を換へて之を言はば吾人は絶対佛陀の不可思議力を疑惑すと雖、佛陀之を疑ひ給はず、吾人疑惑の衆生をして必ず信樂せしめたまふ、是大慈大悲の不可思議の誓願によらずん

はあらず、此に至りて人生何事か佛陀の力にあらずらん、何れの信仰か遂に絶対の信仰に引接したまふの門戸にあらずらん。聖人自ら告白して曰く、愚禿釋の鸞論主の解義を仰ぎ、宗師の勸化に依て久しく萬行諸善の假門を出て、永く雙樹林下の往生を離れ、善本徳本の眞門に廻入して偏へに難思往生の心を發しき、然るに今既に特に方便眞門を出て、選擇願海に轉入せり、速かに難思往生の心を離れて、難思議往生を遂げんと欲す。果遂の誓良に由ある哉」と、嗚呼吾人亦何等の幸か、絶対佛陀の大慈悲を蒙り、眞實如來の光明に接するを得たり、首を回らして過去を顧みるに徒らに他人を疑ひ自己を疑ひ人生を疑ひたる時は人間己外此の如き大慈大悲の在すことを疑惑したれば也。或は既に佛陀を口に自ら信仰に入れりと考へながら猶煩悶絶へざりし所以のものは自己は徹頭徹尾罪惡の塊にして佛陀は洵に絶対無量大悲大慈の塊たるを知らざりしに由れる也、(信仰之餘瀝宗教的同朋参照)今にして之を思ふ、此の如きの疑惑、此の如きの煩悶、皆今日の安慰に導かるゝの經路にして、其間常に佛陀の大慈吾人疑惑煩悶の徒を捨てたまはざりしにやらずんばならず、是實に引接の本願力にあらずや、又果遂の本願力にあらずや、此に至りて粉身碎骨知恩報徳の念切々禁する能はざる也而して今や翻て社會を見るに皆佛智不思議を信せずして徒に疑惑煩悶するの人洵に多し、良に傷嗟すべく、深く悲嘆すべし。然れども吾人自己の經路に顧みるに是亦各人避くべからざるの事、既に佛に引接、果遂の願在せば、何れの人か如來大悲の救済に洩るゝあらん、冀くは疑城胎宮懈慢界に彷徨するの人共に與に速かに絶対無碍の一道に入りて千古常住極樂無爲涅槃界に入らむかな。

本年一ケ年間の社説は親鸞聖人を正而より鑽仰したるものにして聖人の人格、悲嘆、家庭、悪人救済、佛天のはからひを初として、遂に信仰の骨髄たる教行信證眞佛土化身土六卷の實驗的意義を闡明して本號に至りて完結し畢りぬ。嗚呼聖人の文字は句句信仰の結晶にして仰げは彌高く鑽れば爾堅く、其味殆んど盡くる所を知らず、聖人の一生は畢竟其信仰の實現したる活歴史に外ならず。吾人は聖人を得て人生初めて光ありと謂ふべし、明年は更に筆を改めて平易明晰を主とし彌々聖人が信念を味ひ奉り益々實驗的意義を闡揚せんかな。

信仰餘光

信仰と律法

律法主義は自己の力を以て自己を律せずとするもの、其態度直撃にして一點余裕なき詢に尊ぶべしと雖、是佛在世時代若くは之を去る遠からざる聖賢或は之を行ふを得べし、濁末の人遂に其器にあらざるを奈何せむ、蓋し律法主義は強て心を矯め行を律する者、人若し其器にあらざるして枉げて之に従はんとする、是自力を以て自ら極端せんとする者管に無効なるのみならず、遂に人をして偽善に陥らしめ、虚飾に走らしめ、律法主義の道德は遂に人をして其信仰的生命を殺さしめすんばあらざる也、親鸞聖人曰く、外に賢善精進の相を現するを得ざれ、中に虚假を懐けば也と、嗚呼虚假不實の徒何ぞ賢善精進の相を現せん、須らく内心の暗愚を慚愧して唯絕對救濟の慈光を仰ぐべき也、人生律法的羈絆に於て何ぞ價値を認めん、唯信仰的自覺に於て無限絕對の生命を認めんのみ

信仰と慚愧

人信仰的自覺に達するは我無限大慈の光明を蒙れることを

見出すこと也。我既に此の如きの恩寵を蒙る、此に於てや感謝の念禁するあたはざる也、而して感謝の反面は慚愧なり、從來我此の如く恩寵を蒙れることを自覺せずして以爲らく、我

善を行ふべく、我人を助くべく、我徳を修むく、我佛道を成すべしと、何ぞ其態度驕慢の貢高を極めたる、何ぞ其佛陀の徳を私するの甚しき、今にして之を想ふ、人間は益々罪惡苦悶の塊肉、唯佛陀の慈光のみありて救濟を得たる也、此に於てや佛陀は慈悲の塊、行住坐臥常に吾人を照して大安慰を得せしめたまふ、此に於て自己の全體を投して慚愧懺悔を禁する能はざる也。

信仰と奇蹟

信仰は夫自身目的也、人生信仰に達せば此に始めて其究極に達したるものと謂つべし、故に此に至りて人生全く其意義を一變し、期せざるに活路開け、思はざるところに幸福來る、げに信仰の一滴は四大海水を傾け來る自在力を有する者也、經文に記載せる諸の奇蹟皆文字の如く事實となり來る、火燒く能はず、水溺らす能はず、刀杖段々に壞するもの皆絕對の力より來らざるはなし、而して信仰の眼よりみれば人世悉く

絕對の慈光溢るゝのみにして、如何なる奇蹟も理解せられざることなし、否人世は悉く奇蹟を以て満たされざるはなし、天地日月星辰を初めとして一切の冥衆皆絕對信仰の人を護持養育せざるはなし、故に信仰より來る人生觀及び世界觀は一として佛陀の恩寵ならざるはなし、提婆阿闍世の逆惡も畢竟惡人救濟の慈愛を示す所以にして息災延命も七難消滅も亦絕對不可思議の力より來らざるはなし

信仰と祈禱

信仰は此の如く奇蹟を持來す、然れども若し奇蹟其者を目的として信仰を運ぶあるときは既に是れ絕對の信仰に非るなり、故に日月を拜する不可なり、鬼神を祀る不可なり、吉日を見る亦不可なり、若し絕對の佛陀を信ずと雖、現世の幸福を目的として之に信賴するときは是れ絕對の信仰にあらざる也、若し信仰なくんば國家其意味を見出すあたはず、父母其意味を見出す能はず、六親其意味を見出すあたはず、親鸞聖人菩薩戒經を引用して曰く、出家の人は國王に向て禮拜せず、父母に向て禮拜せず、六親に務へず、鬼神を禮せずと、彼世上所謂祈禱の如き若し人生或目的の爲に鬼神に事るが如き最

も不可とする所、聖人論語を心讀して曰く、子路鬼神に事へんことを請ふ子の曰く、事ふる事能はず、人焉を鬼神に事へんやと

夫秋もさり春もさりて、年月を送ること昨日もすぎ今日もすぎ、いつの間にかは年老の積るらんとも覺えず知ざりき、然に其中にはさりとも或は花鳥風月の遊びにもまじはりつらん、又歡樂苦痛の悲喜にも遇ひ侍りつらんれども、今に夫れとも思ひ出す事として一もなし、唯徒にあかし徒に暮して老のしらがとなり果てぬる身の有様こそ悲しけれ、されども今日迄は先常の激しき風にもさそはれずして我身あり顔の體を備々案するに、唯夢の如し幻の如し、今に於ては生死出離の一途ならては、願ふべき方とは一も無く二もなし、之に依て茲に未來惡世の我等如きの衆生を手易く助け給ふ阿彌陀如來の本願の在しますと聞けば、誠に頼母しく雖有くも思ひ侍るべきなり、此本願を唯一念無疑に至心歸命し奉れば、わづらひもなく其時臨終せば在生治定すべし、若し其の命延びなば一期の間は佛恩報謝の爲に念佛して畢命を期とすべし、是即ち平生業成の心なるべしと慥に聽聞せしむる間、其決定の信心の通今に耳の底に退轉せしむることなし、雖有しと言ふも愚かなるもの也、(中略)然るに予既に七旬の齡ひに及び殊に愚闇无才の身として片腹痛くも斯の如き知らぬせ法門を申すこと、且は斟酌をも願みず唯本願の一筋の貫ふと計りの餘り、卑劣の此の言の葉を筆に任かせて書き記しはりぬ、後に見ん人誹りを爲され、是れ誠に讃佛乘の緣轉法輪の因ともなり侍りぬべし、あひかまへて偏執を爲す事、ゆめ／＼爲す事勿れあなかしこ

于時文明年中丁酉暮冬仲旬之比於爐邊暫時書記之者也

【蓮如上人御文章】

講話

眞愚は智なり

(第二求道會講話)

近角 常觀

今日は眞愚は智なりといふ題を出して置きました。此題を出します時には深く感じましたので、其感を言ひ顯はすに何れも適當な言葉がない爲に自身の考の上から思ふ通りの言葉を以て題と致して置きました。其後も常に此事を思ひ又今朝以來も殊々感ずべき事に出遇ひまして益々感じを深くしました事であります。

我等は愚なる者である。然るにそれを知らずして唯自分は賢い者であると思つて居る。我々は眞の愚者であるといふ事が知れた時始めて眞の智者となるのである。一旦佛に向ては我等は眞に愚なるものである。此事は私自身も常に思つて居るつもり、佛の境界は不可思議にして到底凡夫の淺薄な心を以ては量る事が出来ない、愚な者である。法を信ずる上に於ては己は眞に愚者である知られたのが即ちこの光に接したるものである。信仰といふは己の淺間敷愚なものである事を知り佛智の高大なる事を仰た處。私も平日から云つても居り承知もして居ると思つて歎異鈔の味を多くの人に御話をし又自からも喜んで居つたが、此間一の場合に出遇つて深く感じました。其

場合と申すのは、其人は身に一丁字なき愚者である、處が其信仰と云つたら實に圓滿で、一身上の事についても死ぬるといふ事についても皆總て高大なる大慈悲に御任せしてやつて居らるゝ、其状態といふものは先づ八面玲瓏ともいふべきものであろうか。其人は身こそ一文不知の愚者であるが、一向に念佛を稱へて喜ばして貰ひ甚だしく喜ばるゝ時杯は其人は腹がへらぬといふ事である。其人のいはるゝには、私は至りて愚な者でありまして、何ういふ理がありますか少しも存じませぬが、私は唯南無阿彌陀佛と稱へさせて貰ふて喜びます、そうして死なば必ず極樂へ參らして戴くものと嬉しう存じて居ります。實に圓滿なる状態である。私が字でも少し讀めするならば樂も一層多い事でありましたしうけれども私は文字といふものは嘗て學びた事なく、何もしりませぬ、解はわかりませぬが唯念佛をさして貰ふて喜んで居りますといはるゝのを聞いて私は其人の最不幸な境遇にありながら其安心の如何にも強いことに深くうたれました。己は是迄何度も歎異鈔を拜讀し、殊に其第二章の如きは聖人の信仰が顯はれて居る有難い、といつて居たのに、其人の話を聞いて見ると到底其人程に言ひ表はし得なかつた、其人は念佛といふ字も知らぬのである、親鸞に於てはたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとよきひとのよほせをかうふりて信ずる外に別の仔細なきなり。此御言葉を私は何遍これまでにいふたか知れませぬが、私の言ひ方は未だ二重にも三重にも文をつけ、つやをつけて居りました。此文の中では殊に信ずるといふ處が力があるとかといつて自分も力瘤を入れ、唯佛は大なる慈

悲だとか、力だとか何だとか或は念佛は高大不思議の力だとか何とか、斯とかといつて居た。それが偽といふのではないが實際其人の様には有難くは云へなかつた。其人が私は何も知らぬ解もわからぬが、能くわかつたらばさう面白からうと思ひます然し今は解らぬけれど稱へては喜ばして貰ふといはれたのは全くこゝである、よき人の仰を蒙りて信ずる外に別の仔細なきなり。念佛は誠に淨土に生るゝ種にてや侍らるゝ、總してても存知せざるなり、たとひ法然聖人にすかされ參らせて念佛して地獄におちたりとも更に後悔すべからず候。何うも度々讀んで人に話をし乍ら其人丈の有難味を言ひ顯はす事が出来なかつた。念佛は淨土に參る種にてや侍らるゝまた地獄に落つる業にてや侍らるゝ、總して存知せずとは信仰の強い言葉ぢやといひ乍ら心に存知せりといふ様な風であつた。念佛は結局陀羅尼と同じである、地獄に落つる業にてや侍らるゝとは全く佛にまかせた形だと彼是といふて居たのは存知して居た様だが、本當に存知せぬのぢや。然るに其人は私は何も存知せぬといふて居て然も能く存知して居らるゝ。これには私はえらくうたれた。愚者は智恵ぢや、少し學問をすると小智慧が出来るから、解る事も解らぬ様になる。文字でも少し讀めると我は斯々に味うとか、誰の實驗は何うだ、誰の經驗はこうだ、彼れかとかこれかとか、己れかとかといふが、必しも當りては居らぬ。兎に角一廉知つた様にいふが、たゞ少し字義の解釋位を知たのぢや。佛は知つてから信ぜらるゝのではない。其人が何も知らぬといふて、彼は云ふ事なく眞に喜ばるゝ姿を見て、私は如何にも愚者こそ眞に智者て

あると感じました。信仰の上からいへば、愚者だ、愚者程善い。其後も私が出遇はす事柄が皆此事を證明せざるものはない。其一是明日も話すつもりであるが、先日一人の人が私の宅へ來られた、これは近頃監獄から出られた人でありました。此人の如きも社會に居る時彼は智慧を振舞はれた爲に入監する事となつたのである。處が此度愈出獄する様になつて考へらるゝには、ア、己は是迄申譯なきとを爲て居つた。今から愈家へ歸るのであるが、何うも歸れない、いや然し何んを身となつて居たにせよ子が親に歸るといふとは差支へも無い。嘗ても教誡を受けし如く唯歸れば善いのでないかと考へた。出獄の時は親類の迎ひも受けて、其時には入監してから得た信仰の模様杯も話したさてそれから愈家の門口まで來た處が種々の念が忽ちに湧き出て、何うしても入れぬ。己は總ての人々に對して濟まぬ。仕方がない何うしようかと思つて居る時に考へつたのは、自分は此後家を離れて生活すればよいのであるすれはこゝ苦しいのに強て家へ入らぬてもよいてはないかと思つて忽ち踵を廻らして停車場に引かへした。處がそれとも何が氣か濟まぬので、再び又家の方へ引かへした。そこで嘗て聞いた事を思ひ出して兎に角入れといふので入つた。處が實に不思議である。親類の人等も集りて一刻々何故早く歸らぬかと待ちに／＼居てくれられたのであつた。ア、こゝといふ事は兼ねて聞ては居たが、か程とは思へなかつた。實に今迄自分は如何に兄を苦しめたかといふ事を思つと、何うして詫をしてよいやらと一向氣をもんで居たので、家の前迄實際來て居がなら入る勇氣が出なかつた。然るに思

ひ切て入て見れば實に案外で、更りてこんなものを迎えてくれたのには私は非常に感しましたと話された。私も亦此人の話を聞いて自身か云ふて聞かせた事を事實の上に見る事を得て深く感じました。本當に我々はかくと聞いて感じた事を、後で彼是と計らひを入れては苦しむ様な事が多い。我等は愚者だ。實に此事實の如く戸外に立ちて而して彼是思ふて居るのである、これを思へは我計ひをうちすて、眞に己は愚なりといふ事を知つたが眞實佛の眞智を知りたのである。又或人の如きは人を怨み、人を憤り種々して二年間も苦むだ、最後には妻を疑ひ味方をも疑つたがこれ全く何事も己の疑といふ心が本となつてかく間違を生じたのであるといふ事を知て遂に信仰に入られた。兎に角あゝぢやこうぢやと己の方で種々に念を廻らして居るのが佛の方では我々の落ちつくべき先はちやんと知れてある。それを信仰なき人は信する事か出来ないで迷て居る。我々は理屈の事は知らぬが、此世の事は總て皆佛の方より見れば、成るべき様、行くべき道、一切悉く出来てあるのである。そこで何れも苦しむだ經驗のある人が言はるゝのを聞けば、信仰のない人には分らぬけれど、此世程美妙な處はない。何故に此様な美妙な處に居ながら此事か知られなかつたかといふて喜はれる。前に申した人の如きは己の妻か己に對して忠實にして居るのに、それを更りて疑て居た爲に、世間はそれか原となつて厭ふべきものとなつたのであるが、一度其疑であつた事を知られて後は全く世間の見方が一變して最も喜ぶべきものとなつた。委しくいへぬが要するに、我々の計らひで種々に苦しむ争をする、それか爲に何うしても

眞の智慧に入る事が出来ぬ。如來智慧海、深廣無涯底、かゝるものに我々が寸法を入れて居るのは間違である。

何うしても己の考は間違ひ、佛の方こそ間違がない、度々いふ通りこうやつて會つて話す一時間も皆智慧海の中に引き入れられて居るのである。それに我知つた顔に話すのはよくない。佛の高大なる力は強い、私は其點よりいへば今日も一人の人がいはるゝのを聞いて喜んだ。それは頗る喜んで居られた。彼の朝に道を聞いて夕に死すとも可なりといふ味を此人によりて充分味ふ事が出来た。こういふ人に對しては、少しも力を入れて話さずとも、自然に恢廓高大の思に住し實に心持がよい。然るに人に對して妙な障壁を置けは置く丈け話か自由でない、佛の話をするのをもそうである。佛に對して我々の計を入れるは無限のものに限りをつけて蓋をした様なものでもうをうすれば人間の智慧だ。かく佛智に蓋をしたのが人間の智慧、己の指金で佛を計るのが人間の智慧である。唯信する外に別の子細なきなりといふ眞愚なる骨目に、理屈や推理をつけてやつて居る事が多い。こういふて來ると最早言葉が盡きてしもうて何ともいふ事が出来ぬか、兎に角我々の智慧理屈計ひで考へて居る間は、佛智の不思議を知る事は出来ぬ。全体佛を知る抔といふ事が己に計らひぢや。こういふて來ると何ともいふ事か出来ぬ。然し尙信仰問題についていへは、現今此問題について一つ渡り難い點は、佛は必ず善くして下さると思ふて居るといふ、思ふといふか人間の計らひ、いぢわるく言へば、こういふ思の下には不安がある。現今ではこう思ふて居る、信じて居る、考へて居る、といふ如き存

外信仰的の言葉が更へりて蓋はれて居る。佛はよくして下さると聞くと、そう思はねばならぬのかと思ふ人がある。それはよくない。嘗て西有穆山師の處へ或人が行て、宇宙と我とは一体と思つて居るが何うですかと問ふと穆山師は答へていはるゝに善くな。其思ふといふが善くないといはれたといふ事であるが、實に最な答である。世間の人の信仰は思ふてこしらへてをる。それはいかぬ。こうであるとか、あゝてあるとか、解たとか何とか言ふ事をやめて、自己の一切を擧げて佛に托し我は眞に愚者であるといふ處に至らねば佛智の高大なる事は知れぬ。そこで自分の事を愚禿といはれた味が有難い。私も始めは愚禿といふは唯謙遜の語とのみ思つて居つた、そういへばそうぢやが、其自覺はあれは何にもわからぬ、行も及ばず力もない。愚禿は涅槃經の中に破戒の人を禿といふとある。吾人は聖人を謙遜といふ丈け愚だといふて尙理屈をつけて考へて居た。これ全く眞愚の處である。然るに眞愚なる人は少ないもので少し文字をも讀む人は、一文不通の輩の念佛申すにあふて、汝は誓願不思議を信じて念佛申すか又名號不思議を信ずるかといひ驚かして、二つの不思議の仔細をも分明にいひひらかずして、人の心をまどわす事此條かへすゝも心をとめてもひわくべき事なり。と聖人は誠められた。次の章には又經釋を讀み學せざる輩、往生不定の事、此條頗る不足言の義と云つべし、他力眞實のひねをあかせる諸の聖教は本願を信じ念佛を申さば佛になる、其外何の學問かは往生の要なるべきや。といはれてある。歎異鈔を讀み乍ら未だ種々と理屈をつけて居た。一文不通の愚者といふが有

難い。私の從弟が三年も軍隊生活をやつて歸てから、佛前に參り、私の如き者は傳導も出來ず申譯も無いものだと思ふて御文を拜讀する中に彼の、夫れ八万の法藏を知るといふとも後世を知らざる人を愚者とし後世を知るを以て智者とすといへり、といふを讀んで大に感じた、固より此從弟と申すは餘り學問をする事が出来なかつた。然るに己の眞の愚者なるを知り佛智の高大なるを喜ぶに至りました。實に此御文の御言葉の如く、イロハも知らぬ愚者と雖ども信仰の人は眞の智者である。世の如何なる智者と雖ども我計ひを廻らして彼是として居る内は到底佛の眞智に接する事は出來ぬ、絶對の安心は得られぬ。世の外交政治教育何んでも不思議の佛智に安住して行けばよいが、そうでなくして己の方面より割出してやつて行く時は如何なる時でも必ず甲論乙駁極まる處がない。而して佛智に安住してやつて行く時には結果を見ぬ。結果のみに走るから甲論乙駁るといふ風になる。然らば結果を見ざれば結局何うなるかといふと實に不思議である。結果は見ないけれどもそれが歴々と事實になつて顯はれて來る。而して信者の信は法華經の、火やく能はず水溺らす能はずといふは事實である。然れども此爲に信するといへば人間の計ひといふものである。人間の計ひが總て絶えたる時顯はるゝが即佛智である。佛の智慧は我々が小なる智慧を捨て、總て佛に任せる處に始めて生ずるのである。私は幸に日々新しき信者に遇はして貰ふて益此味を知らして戴いて居る。御和讃に、阿彌陀如來來化して、息災延命の爲にとて、金光明の壽量品、ときあき玉へるみのりなり。一切の功德にすぐれたる、

南無阿彌陀佛を稱ふれば、三世の重障みな、から、必ず轉じて輕微なり。これは現世利益和讃といつて信仰の人は期せずと雖も自ら此利益ありといふ意味である。かくの如くにして人生の複雑なる間に處して行くのである。

要するに信仰といふものは、全く親鸞は唯念佛して彌陀に助られ参らすべしとよき人の仰せを蒙りて信する外に別の子細なきなり。といふ處であつて、己の力で何事も皆知り盡して信するに非ず、一向己の愚なる事を知りて佛にすがる處が最も味のある處である。充分話す事が出来なかつたが兎に角我れ考へたり、心得たり、といふ考への起つた時に最も吾人の警戒を加ふる必要がある。何事のおはしますかは知らねども忝けなきに涙こぼるゝ、此味が要諦である。窮りなき佛智をば疑多き世俗の智慧を以て計らひを入れ易い。聖人の仰せには我が善き事を爲し得るといふ間は不了佛智の人だと仰せられた。何うかして吾人は小智を捨て、疑惑を離れ、廓然廣濶なる佛の大智慧を仰いて眞愚なる事を知らして貰ひ、我計ひを打ち捨て、御慈悲を喜ばして貰ふが眞愚の智なる所以である。

不可思議の信

(求道學舎日曜講話)

近角 常觀

今日の題は不可思議の信と謂ふのです。今年は段々と「教行

信證」の順を追つて話して來ました、此の前には佛陀、佛陀

の慈悲は光明である壽命である、佛陀の難有きは極はまり無き光り、極はまり無き生命を賜はる事である、之が味である事を申しました。之は即ち「眞佛土」に當るのです、此の事は今月の「求道」の社説にも書いて置きました。然るに親鸞聖人は亦其の眞佛土の眞佛に對して、つまり言へば側面より言つたと謂ふものか、更に「化身土」巻といふを書かれてあるのです。夫て此の化身土巻と謂ふのは、話が六ヶ敷くなりませんが、其の眞佛で無い佛を眺めて、眞佛の味は斯ういふのが眞佛である、と言ふ事を裏より能く解かる様に示されたものであります。即ち眞佛の味如何と言ふ事は之れによつて彌々明瞭になるのです。今日は此の事を御話致そうと考へて即ち此の題を出したのであります。

親鸞聖人は眞實の信仰と、未だ極に到らぬ信仰とのさじめの要點を言はれて、つまり不可思議を信じたのが眞實の信仰で、其反對が眞實の信仰で無いと謂はれた。斯く言つて仕舞へば一個の語になつて仕舞ひますが、之をいつても茲で御話する實験の信仰の経過の上よりいくと能く解かるのです。今日多くの人が諸種の問題上より苦しまれる。實際人生の経験は、諸方面何の方面からでも起つて來るのですが、茲に一問題に就て御話すると、今迄人を疑ひ世を不平に思つた。斯くて其の苦しみの極に至つて、一朝翻然として自分の悪い事に氣が就て來る、全體自分の方から疑つて掛つたら色々の疑ひ、苦味が出て來たのである、世間を眺めると一つも疑ふべきものは無い、今迄世間が我を迫害すると計り思つたは非常

なる間違であつた、世は實に都合能く、實に自分に都合能く出來て居る、今迄は我を導いて遂に此の味に到らせて下さつたのだ、世界は如何にも不可思議に出來て居ると、茲の所で説明は出來ぬが、實に不可思議の信仰に入るのです。此に到らぬ已前とはいふに、或は人の一舉一動に左右され、人褒めれば無上に喜び、人憎くめば人を憎み、或は空中に樓閣を築いて苦んで居る。併しながら一點茲に氣が着いて、今迄彼是苦んだは全く自分の計ひに過ぎ無かつた、佛陀は我々を導いて下さる、導いて下さる力は世に溢れて有る、と解かる時凡ての問題は消滅して不可思議の信に入らせて貰ふのです。併しながら夫をさう思ふたのが信仰ではない、最後に茲に氣が着いてハッと解かり、解かつたとも、どうとも云へぬ、唯不可思議だと斯う解かつて、初めて佛を信じ慈悲に出會せて貰へたのです。故に信仰に入つた味は自分でも言ふ事は出來ぬ、言へぬが實地に味はうと彌々不可思議の味ひがあるのです。親鸞聖人は之を種々に言はれた、或は彌陀の本願―これは本願の理屈を言はれたのでは無い、所謂誓願不思議と信せられたのです。又名號不思議とも言はれた。之は現に今迄色々の事で信仰に入られた人の中で、或人は常念佛を稱へて居られたか、どうも充分の安心が出來ぬ、前には唯常に念佛すると思つてやつて居られる間に、いつと無く不可思議の歡喜に遇はれた事實がある、如何にも名號は不可思議です。昨日も九段で申した如く、一文不通の者が唯念佛して居る間に、いつの間にか不可思議の力を感ぜさせて下さる、如何にも難有い、唯不思議と信じつる上は兎角の御計ひあるべからず候也です。偕て

此の不可思議が何處から解るかと言ふに、凡ての事が皆縁になつて下さるのです。つまり針の穴程の所からでも一點光りが差し込めば忽ちに皆解る、世間の上にも我運命の上にも唯不可思議であると解つて下さるのです。此の不可思議と解かるのが即ち信仰の要點です。聖人は初めに申した如く、此の不可思議が信せられたが信仰であると言はれた。然るに我々が眞實の信仰に入らぬ前、即ちまだ修養であるとか、信仰であるとかなど言つて居る間は、何とかして信仰を得度い、佛陀の境界に到り度い、理想的に實行し度いと頻りに求めて居るのです。斯くの如く猶ほ求めて居る間は、之は信仰に到るの道行さとして極めてよいが、決して信仰の状態では無いのです。寧ろどこに行くかと言ふに、却て惱み苦しみとなるのです。全体理想も持たず、眞地目でも無い人には惱みも苦しみも無い我々は理想が有度い、安心が爲度い、早く佛陀に接し度いと焦せる、焦せる爲めに苦み眞地目になり度い爲めに惱むのです。勿論此の状態に居つて自ら信仰だなどと思ふ者も有るまいが、全く此は信仰の状態では無い、親鸞聖人が觀无量壽經の讀み様の上では、之は定散の信仰になるのです。定善の信仰と云ふは即ち自分の心で佛をこさえ、佛を見度い、見やう、と勉め信仰を擧まうとするのです。亦散善の信仰と云ふは實行の方面で、佛の如く行ひ度い、理想の如く進み度いと努める、是が散善の信仰です。此は双方共悪くは無いが、矢張り自分の力でやろう、自分で勉めて佛の御姿を目に見やう、自ら満足するだけの信仰に行き度い、とするのだから未だ絶對の信仰では無い、勿論信仰に到るの道行さには違ひ無いが、

不可思議の佛陀はまた見えて居無いです。猶ほ極端に言へば、是は人間の力で佛が見える、イヤ成れるといふ横着の考から行かうとするのだから、到底安心が出来ないのです。けれども夫を進めると最後には人生が躓いて仕舞ふ、是でも足らぬ、是でも足らぬ、手に取るやうにならぬと、結局は苦みに陥るのです。處て夫が、どうして信仰に出られるかと言ふに、自分の力で佛を見るので無い、其の苦みの人間を佛が助けて下さるのだ、佛陀が常に我を護つて居て下さるのだと、氣が着くと今迄の勉め心の悪い事が解かり、頓に信仰に入れるのです。散善の實行の方から謂つても亦同じ事です。散善の間は、自分に汚れがある、どうかして理想的に行かねばならぬ、世は厭はねばならぬ、是でもいかぬ、あれでもいかぬと一生懸命に努力して居る。故に世間普通より見れば實に眞面目な立派な人ではあるが、併し其間は未だ安心が出来て居ませぬ。其の極に進むて四方八面窮して仕舞ひ、自分の力では何事も出来ぬ、全體自分で仕やうなどと思つたが間違であつた、實は日々の生活も皆如来大悲の御恩であつた、今迄自分て爲たと思ふたのも全く如来の御力であつたわいと、佛を見た時從來の力み心は去つて、光明に出會ひ安心出来るのです。親鸞聖人宜はく、世の修行者は佛を見ずして、我が力にて佛を見やうとするから可かぬ、要は佛智の不可思議が信ぜられると否とである、世の人は佛の不可思議を信ぜぬ故自分の如く悪くては駄目だと思ひ苦しみ却て佛の御力に背いて居るのである、例へば自分に善い事が出来たからとて、夫に固執するのでは無い、善さも悪さも皆我にあるのでは無い、唯不可思議の佛力に任せ奉つて生活し助けて頂くのである、と斯う言つてあります。

夫て此前にも言ひましたが、「化身土」卷の要領を御話すると、佛智、不思議智、不可稱智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を信せずして、猶ほも罪福を信じ善本を修習する人、即ち自分で勉めて善くならうとして居る者には、眞實佛陀の光りが見えて下さらぬ。故に夫等の人は例へば善いにしてあつても、佛陀を眺めて善いのでは無くて、單に人間的に善いのである。故に夫等の人は未來に於ては疑城胎宮邊地懈慢界に生れて、七寶の宮殿に黄金の鎖を以て繋かれ、久しく淨ぶ事か出来無い。夫は佛陀の境界の同一なる事を悟らずして、自分の計ひ心より差別を着け、眞實佛陀が見られ無かつたからであるといふのが要領であります。即ち佛力不可思議が目に着く所、全く一佛の御力と解る所が要領であります。

今日は此の味を御話致たいのですが、どうも廣くなりて旨く言ふ事が困難です。何處から話して行きませうか、度々申すが矢張「觀無量壽經」に就て話すと致しませう。親鸞聖人は「觀經」を讀むに實に巧に難有く讀まれてあるのです。夫はどうかと言ふに、親鸞聖人は、「觀經」には表と裏との二面がある、隠顯兩様の意味が有ると見られてゐるのです。之を御話するには先づ「觀經」の書きやうから申して行きます。昔印度に阿闍世王と謂ふ皇太子が有つて、悪友提婆の勧めに動かされ、父王頻婆娑羅を殺し、母の韋提希夫人を獄中に幽閉した。之は常に信仰第一の標準として御話して居る所の彼の王舎城の悲劇であります。韋提希夫人は我が子の爲めに獄中

に密閉せられて煩悶に堪え無い、即ち獄中に於て釋迦佛を見むと請はれた。其處で釋迦佛は阿難、目連の二弟子を連れて、神通を以て獄中に現はれ給ひ、韋提の爲めに法を興へられた。茲の書き方が如何にも難有く書いてあるのです。其の時釋迦如来は眉間より光を放ちて、偏く十方無量の世界を照らし、韋提の爲めに二百一十億の諸佛の淨土を見せしめられた。是に於て韋提は此等諸佛の淨土を悉く見了りて即ち佛に對して申さるゝには、「此等諸佛の淨土何れも清淨にして光があるが、自分は此の中で阿彌陀如来のみ許に生れ度いと思ふ、願はく其法を教え給へ」と請はれた。佛之を聞いて即ち微笑して宣はく、「爾の時世尊韋提希に告げ給はく、汝今知るや否や、阿彌陀佛此を去る事遠からず、汝當に繫念して諦に彼國の淨業成じ給へる人を觀ず可し」と。則ち佛の示さるゝには、汝今知るや否や、汝が今見奉つた阿彌陀如来は決して遠い彼方に居給ふのでは無い、現に今我々は久遠の昔より今日今時に至る迄、此の阿彌陀佛の御恵みを蒙つて居るのである、佛陀は今茲に此の我々の上に居て下さるのであると教えられた。親鸞聖人は茲の所を「化身土」卷に於て、「本願成就の盡十方無碍光如来を觀知すべし」となり、之は釋迦佛が眞實の安心を得るのは、盡十方無碍光如来の力を信せさせて貰ふのだと示されたのだと仰せられてあります。ア、汝は今韋提の中で苦しんで居る、我子の爲めに殺されると苦しんで居るが、夫は人間をのみ眺めて居るから、其汝を助けて下さる阿彌陀佛は決して汝を去る遠き所に離れて居ては下さらぬ、汝は今現に其の光明の中に居るので無いかと仰せられたのであります。今も

講話を初める前に或る方から難有い歌を承はつた、「阿彌陀佛を去る事遠からず稱ふる人の袖に袂に」てしたか、「眺むる人の袖に袂に」としてしたか、兎に角遠方を視るのでは無い、今が其光明中に居るのだといふ難有い歌でした。韋提希夫人は此の語を聽いて、ア、と喜びが溢れ娑婆がどうだの、不孝の兒がどうだのと言ふ苦味は、夢の醒るが如くに醒め去つて、五百の侍女と共に无生法忍を得られました。その所を「觀經」には韋提希が眼前に佛の光明を見たと言ひてあるのである。

其所で之より、「觀經」の講釋になります。一寸した事ではあるが、問題は今の眼前に光明を見られたと言ふ所にあるのです。私は此事實を其の通りに、如何にも夫人は光明を拜まされたに違はぬと信するのです。此は別段珍らしい出来事でも無いので、加様の實例は當學舎に來られる人の中にも澤山あるのです。其の光りを見て如何なる心が起るかと言ふに、佛陀の境界は廣々として難有いと言ふ心が起り、夫が縁となして信仰に至れるのです。一寸近頃は斯言ふ類の見神などいふ實驗が非常に多い、之は確に有り得べき事實なのです。併し要點は何處に在るかと言ふに、目に見たと言ふ所では無い目に見たと言ふ丈けて彼は騒ぐはいかぬのです。唯夫が縁になつて、我々は知らずに居たが、現に如斯き大慈悲に出會つて、最上佛は自分の上に居て下さるのだ、と氣着かして貰つて信仰に至るのが要點です。目に見ると言ふ事實よりも、佛陀は如何にも不可思議だと解かるのが要點です。夫故信仰に入る道の最も肝要の所は此の一點です。私は澤山の實例を

持つて居る、何れも經過は千差萬別であるが、要點は皆茲に歸する、其處へ出る具合は何の道より來ても一になるのです。二三の例を擧げて見ると、或人は病苦に苦しみて苦し紛ぎれに念佛して居られた。すると或夜西の方より光が來つて自分の身を包んだ、ハッと思ふと夫より病氣は頓に快癒し、此か因縁となつて不可思議の信仰に入られた。亦先達て九段で告白せられた田尾氏の實驗もさうです。田尾氏は病が募つて九死一生と言ふ處になり、遂に卒倒せられんとする時、耳に聲あり、有り／＼「助けてやるぞ」と言ふ呼聲を聞き、之より病忽に癒え、其の後漸次にして信仰に入られたのです。之等は何かと言ふに、皆不思議の實驗が縁となつて、不可思議の光が我々人間的の疑を破つて下されたのです。我々は常に人間の無邊の疑にくるまれて居る、夫が何處か一點でも破れて不可思議の力が現はれて下さる時、從來の疑は頓に晴れ、人間の力では解からぬ、佛は不可思議だと解つて來るのです。此の不可思議と解かるのが要點です。以上申したのは目に見、耳に聞いた例ですが、又或人は我は何でも實行仕度いと考へて、一ツかど理想的にやつてる積りて一生懸命に勉めて居られた。其中にふと佛を思つてやられると、窮まるやうて窮まらぬ、之は不思議だ、何であらうと思はれると、ア、之が佛の御恩だわいと氣が着いた。而して過去を振り反つて見ると、今迄自分てしたと思つた事が皆如來の御力であると解かり、夫より偉大の信仰に入られた。亦或る人は眞劍て佛陀を念じて居られると、死すべき生命が不思議にも助かつた、ア、有難いとホッと思つて信仰に入られたもあります。斯の如く場

合は種々ありても皆或縁によつて佛の不可思議に氣が着いて、絶對の信仰に入る有様は一です。そして此の信仰に入る時は、前が善からうが悪からうが、皆同じく一味平等で差別が無いのです。我々は昔より此の大恩に遇つて居ながら、之を知らずに自分で佛を求め信仰に至らうとして居るのです。斯の如くして諸方面より色々苦しんだ最後、斯ういふ御恩であつたか、自分は間違つて有つたと知る時、十人百人善人も惡人も皆共に一味の信海に入るのです。更に極端に言つて見れば例へ其の時之が佛陀の慈悲だと迄氣が着かず共、ア、長い間自分は惑つて居つたと解る時、既に佛陀の光明は積極的に其所に現はて居て下さるのです。故に其人はまだ佛の御恩みといふ事が語て顯はせ無くても、夢の醒むるが如く何共言へぬ心地になる、其境界は唯不可思議としか云へぬのです。要するに眞實佛陀の御力は不可思議だと知らせて思ふ事です。之が信仰の味であります。

偕て已上述べるか如き不可思議と氣が就く状態、之は即ち「觀經」にあるのです。「觀經」の隠れたる裏面の意味と云ふは、即ち韋提希の心の上に起つた此の不可思議の信仰を言はれたのです。どうも此の王舎城の一段は如何にも壯大で有難い、先日も友人が來て互に此の事を話しました。友人が言ふには、阿闍世王の說話は小乗佛敎中にも出てある、或る月明の夜阿闍世王太子頻りに求道の心動きて、世尊の許に行きて法を聽かれたといふ事が載つて居る、多分「觀經」のは茲から來たのでは無いかと言ひました。兎にも角にも此の事實は、實に人生悲劇の極である、今日人生上で何と言つても是れ已上の著

しき事實はありませぬ。此の大悲劇の上に佛陀の救濟を説いたが「觀經」の要點です。親鸞聖人の「觀經」は唯夫れ丈けです、之を見抜かれたが即ち聖人の偉なる所です。之は「化身上」巻を拜見すると明に書かれてあるのです。

偕て夫より韋提希夫人は、自分は斯く佛の力て佛を見奉つたが、未來生の衆生は何の方法て佛陀を見奉るべきかと尋ねられた。其所て其方法として「觀經」の定善拾三觀、散善九品の説法が初まるのです。夫を一寸言つて見ますれば、第一に日想觀といふがある、之は西に向つて日の沈む所を觀するのです。私は昨日偶然てしたか九段より歸つて來る道で、ふと西を見ると丁度日の入る時で非常に明かい、ア、奇麗だなと眺めて居ると、段々と明かるく美はしく見えて來る、如何にも光明の奇麗な事を感じました。其中に日が漸々沈んで丁度半分落ちた所が見える、今迄は日想觀を唯斯く觀ずる事と思ふた丈けて、別に深くは考へ無かつたが、成程落日の様は誠に奇麗だ、如何にも我々を西方淨土に迎へて下さる無垢清淨の御光りは斯くの如くて有らう、佛陀が落日を觀ぜよと教へられたは無理が無い、と秋の日の落ちるを見て難有く思ひました。日想觀の次ぎには水を瑠璃の如く想へといふ水想觀があります。已下地想、樹想、八功德水想、總觀想、華座想と謂ふ具合に、凡て拾三觀あります。之が定善の觀念の方です。其次ぎには九品と云つて、九段に別つた散善の實行になるのです。親鸞聖人が表と裏とを眺められたは實に茲の所です。之等定散の方法によつて、佛を眺め理想に近づかうとするならば夫は本當の信仰で無い、之は佛の御力は難有い、佛の御

光は不可思議だと、氣が着く迄の道行きに過ぎぬと仰せられるのです。夫故親鸞聖人は「定善は觀を示すの緣なり、散善は行を顯はす緣也」(化身上)とあります。此は讀方が今迄とは少し別の行きやうですが、定善は觀を示すの緣なので、茲ていふ觀とは佛を信する事を言ふのです。其信するに至るの緣が觀法であると言はれたのです。要するに定散共に信仰に至る迄の方法で、若し未來世の衆生が、之て眞實佛陀が見ると思ひ誤まり、頻りに觀法を凝らし實行に勉めて居るならば、夫は眞實の信仰に到つて居らぬのです。偕て夫が何處で信仰に行くかと言ふに、先きより度々繰り反す如く、其間に何時と無く自分の力ていくので無い、佛の御力が難有いのだと、氣着かせて貰つた時信仰に入るのです。念佛にしても念佛して居る間に遂に信仰にゆく、稱名して居る間に絶對の光を見るのです。斯くて其縁に依つて信仰に入つた最後は、最早や斯うせんならぬ、あゝせぬならぬの我が計ひは要らぬのです。夫て耳に聞き、目に見えて下さる佛の御姿は、之は我々を導かむが爲めに、不可思議境より現はれて下さる雲間を洩る、光りです。我々は此の導きに接する度に縁になつて、彌々佛が疑へぬ事になります。其所て聖人は眞實の佛陀は盡十方無碍光佛である、世に滿てる慈悲、智慧、光明、之が眞實佛陀の徳であると御覽なされた。偕て之を丈六八尺の姿で拜み、目に見、耳に聞いたといふは、即ち其各人の境遇に應じて不可思議境より姿を現して導いて下る方便化身の御姿です。所て方便化身の佛であるからと言つて決して悪いと言ふのでは無い、夫に依つて導かれ絶體の信仰に至るの故、是れ

實に眞實佛陀の大慈悲力の大きな現れです。併しながら茲少しの所で信仰に意外なる間違が生ずる、早い話が佛を信じて病氣が直る、故に佛を信ずると言ふならば、夫は結果の爲めに信ずるので全く意味が逆さまです。夫は無論佛を目に見て病氣が治つた、佛の御力で助かつたと言ふやうの奇蹟は事實に有るので、佛の化現の御力ですから確に有るので。聖人は和讃に於て確に有ると言はれた、私も今迄は左程にも思はぬでしたが、事實我々には解からぬ意外の結果が来るので。生命も延る、病も直る、道心の中に衣食が来る、人の心に和音が来る、之は眼前に歴々起るので。現世利益和讃には

阿彌陀如來來化して、

息災延命のためにとて、

金光明の壽量品、

とききたまへるみのりなり、

山家の傳教大師は、

七難消滅の誦文には、

南無阿彌陀佛をとふべし、

一切の功德にすぐれたる、

南無阿彌陀佛をとふれば、

三世の重障みなながら、

かならず轉じて輕微なり、

南無阿彌陀佛をとふれば、

此の世の利益さほもなし、

流轉輪廻のつみさへて、

定業中天のそくりぬ、

等と示された、是れ疑ふ可からざる事實です。處が茲で一步

意味を取違へて、夫等結果の爲めに稱へやう、三世の重障を

取除く爲に信じやう、息災延命の爲に念佛しやうとなると、之

は大にいかぬ、佛を手段にするのです。之等は佛陀が衆生を導

つて下さる爲の化現の力であるから、夫を唯御力だと頂くな

ら善い、全体落ちる、落ちぬ、助かる、助からぬ等の問題を、皆

て、初めて極まり無き光明中に入るので。我々か日々の生活から今斯くの如く法を聴く事も、一として佛陀の御力を離れては無い、今迄之を知らずに苦んだも御慈悲の御計ひであつた、長々佛陀に根本的に背いて居たのだ、之を氣着かずして世間並みだ等言ふて居たのは全く佛を疑うて居たのだ、邪見煩惱理屈を以て佛を計つて居たのだ、佛の光明を眺めても之は我が斯して居るから斯うなるのだなと思つたは誠に濟まなかつた、と解かつて初めて絶対の信仰に入れるです。更に、もつと極端に言へば、信仰に入る時は夫が御慈悲共、信仰共、左様の語は知らなくても、ア、長々迷つて居ると解かる時に、最う慈悲が現はれて居て下さるので。此境に至つて親鸞聖人の教を讀むと實に能く解かる、不思議も奇蹟も佛力の上に於て確かに有るべき筈なのです。今雨がふる、木の葉が落ちる、鳥が鳴く、皆慈悲の現れです。茲に哀れな人が居る、人が悪事を爲たのは即ち自分が悪いからであると、無縁の人を見て懺悔の心が起る程になるのです。斯くなれば如何なる事でも信ぜられぬ物は無い、奇蹟不思議何でも無い、況んや佛陀の慈悲であれば五劫長載永劫の修業もある、未來もある、或は釋尊を初めとして、方等經の十方三世諸佛の修業も、唯我一人が爲めの偉大なる御慈悲である事が解かるです。茲に於ては最早や慈悲を蒙つて居る事が疑はうとしても疑へぬ、唯不可思議として凡の理屈は皆消えて仕舞ふのです。夫を僅の事なるも佛の化現、導、力、なる事を忘れて、其爲に信ずるとなれば非常な間違に陥入る、此の點は信仰上呉々も注意すべきです。故に佛陀が難有いと迄は言つても、其已上理屈など

佛に任せた所が信仰です。然るに佛に依つて我が爲の結果に行かうとするは、人間の計を以て佛陀の境界に相場を入れるです。我が現世利益和讃に於ても、之は御力の上に有るとは言はれたが、其已上は仰せられて無ひ、念佛は廣大の利益が賜はるとは言はれても、夫故念佛すれば此丈の利益が有るとは言はれて無ひのです。之は不思議の佛智を不思議と信ずるので無くて、信ずれば此結果がある、と限りを着ける、筈をはめるのです。であるから御慈悲の方は、そのけになつて仕舞ふ。親鸞聖人は例へ極樂へ行かぬ爲めに念佛するのでもいけ無いと言はれた、何故なれば夫等の人は如來より給はる信心を、我が物顔に取扱つてる、眞實の信仰の人で無いからです。夫等の人はどうなるかと言ふに、聖人は此の世界での信仰に應ずる結果が未來に於て現はれる、夫等の人は佛智の不可思議を疑ふ傲慢の人故に、邊地懈慢疑城胎宮に沈むと言はれました。此等の人は自分で一分善き事をすれば一分丈け善くなると謂ふ風に信仰に階級を見るのです、此等の人の念佛は、動もすれば眞實に信じて居る様にも見ゆるが、實は自分の生命を助かりたい爲め、往生したい爲めの自力の念佛です、佛力に區割を立てるのです。故に疑城胎宮に沈むと言はれるのです。斯の如く未だ佛智不思議が目に着かぬ先には、例へ佛と言つても間違です、現に實際に名號を稱へ御經を誦して居ても駄目です。夫故聖人は其所のけじめを手強く言はれ、此等の人は邊地懈慢疑城胎宮に落ちると嚴敷く示されたのです。然らば夫等の人は最後はどうなるかと言ふのに、自分の力ではとても駄目だ、凡て御力で善きに爲て下さるのだと氣が着い

は言へませぬ、若も言ふとなれば已に自分の計が紛はつて居るので。親鸞聖人は或人が誓願不思議と名號不思議とを彼是言はれた時に、唯不思議と信じつる上は兎角の御計ひある可らず、かく申すも計ひなり、と仰せられた。斯れでは違ふなど言つて居るのも既に人間の計です。信仰はあゝ難有いと一念信ずるとき、既に信仰に入つて居るので。結局の味は實に茲に来るので、不可思議と信ぜにやならぬなど思ふのも計ひて、實は然か信ずるより外無くなるのです。聖人が定散二善と言はれたは即ち前より申す如く考へる方と、實行の方とであるが、是が必ずしも日想觀や水想觀や拾三觀三福九品を修する事には限ぎらぬ、早く安心仕度い、理想的に實行仕度いなど思へるが皆この定散心です。夫故人生上の事は凡て皆此の定散二善に收まるのです。併し此の定散をやつて居る間に、自然に佛陀の境界に導いて下さるの故、人生の經路は皆佛陀大悲の御導きに外ならぬのです。聖人は難有い事を仰せられた、さう謂ふ具合に計らひ心を起して居るからが佛の御導きだと言はれました。或人の如きは佛を信ずれば病氣が治る、生命が延びると思ふて念佛して居る間に、不可思議の信に入られた、其の様にして辿つて居る事が既に御導き、斯く話して居る今が御導きなのです。故に佛陀の不可思議に境い目を立てる事、其事自身は能く無いが、夫をする事からが已に不可思議なのです。いづも能く話す嫉捨山の物語では、親を捨てて行く道々母親が技を折られる、偕て絶頂に捨てていざ歸らうとする時、御前の爲めに道しるべを爲て置いて遣つたと言はれ、初めて親の慈悲が身に知れた。其の如く我々は親に能く事へてる、上出

來に仕へて居る様に思つて居ても、豈計らんや親は彌々其上に我を思つて居て下さる。我々は一つ角やつたと思つて居ても、頭の頂きから足の爪先迄、ここに一點親孝行など言はるべき個所は無い、教育衣食を初めとして、身体髪膚一として親の賜て無い者は無いと知る時、初めて眞實に親の慈悲が解かる自分で孝行出来ると思つて居る間は、未だ本當に解かつて居ないので。同じく人生上に於ても我々は大地眞地目によつて居る、世間の人は一向平氣で居る時に、自分は佛に近づこうと仕て居る丈けても勝て居る等、思つて居るのは狭捨山の親捨て。一聲の念佛、一粒の食、何處に一點大悲の賜て無い者があるか、世の中凡てが佛智不思議の力です。親に孝行せねばならぬ杯考へてる最後に親の慈悲が知れて来る、考へる事迄が親の力です、卒業して親に見せてやる杯思てるからが親の親切です。最後に極まつて其の驕慢心が破れ、難有いと氣着く所迄、親は導いて下さるのです。親鸞聖人は更に進めて、定散の計ひ心で進まれる迄が十九、二十の願を建て置いて被下つたから出来るのだと迄仰せられてある、衆生に計ひの心あれば佛は其計ひに應じて、願を以て御免し被下らぬ、其の免さぬの大悲慈より十九、二十の願が有るのだと迄聖人は最後に言はれたのです。

已上申したか即ち「化身上」卷の大綱であります。今日の話 はあまり細き所迄涉りましたから、今迄に眞宗の教理を御味ひ被成である方には良かつたせうが、純信仰の方の爲めには或は復雜に過ぎたかとも思ひます。之を要するに絶對の信仰に到らぬ已前の人生の諸問題は、悉く慈悲光中に引入れ被

下爲めの御導きなのです。王舎城の悲劇も此の導きです。度々申した如く此悲劇に就て聖人は和讃に於て、
彌陀釋迦方便して、阿難目連富樓那章提、
達多闍王頻婆娑維、耆婆月光行雨等、
大聖をのゝもろともに、凡愚底下のつみひとを、
逆惡もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり、
と、仰せられた、此の大慘事大苦悶かやかて彌陀佛の力を信ぜしめんか爲に催ふされた方便だと言はれたのです。殊に其の言ひ方か一點の疑もなく、如何にも強い文字です。併し茲が前から申すが如く、動もすれば誤解に陥り易い、どうかすると世は苦しいけれど、然か思はにやならぬの杯思へる事が出て来るのです。此の思ほうとするのが最もいけない、無理に思ほうとするのは、苦し紛れに御慈悲の中に遁げ込まうとするのです。此の遁げる人が信仰に於ては最も良く無いのです。遁げられずに動けぬ方が早く信仰に入り易いのです。眞實に自己の惡しき事が解かり、ア、已前より久しく大恩を蒙つて居たのだと、両手をつきて大聖各諸共に感して來た信仰は再び動きが來ぬ、動きの無い所が信仰です。強いて思はうとする人は思つて居る間は善くつても後は直ぐ駄目になります、不可思議の信仰にあつては世の中か何時でも光明で無い時は無いのです。聖人か化現と示されたは、其各人々に應じて眞實境より現はれた其の光りです、夫て導いて被下るのです。然らば何時信仰に入るのかと云へば、人に依つては自分はその時苦味が足り無かつた杯いふ人かあります。さうしては無くても何時でも入れるのです、即今入る事が出来るので

實 驗

不可思議の實驗によりて
半生の苦悶を脱離す

追 立 次 郎

す。「觀經」で頂けば阿彌陀佛茲を去ること遠からずと示された所です、今現に佛の光りを受けて居るのだと、ホツと翻る時一度に入れるのです。ア、悪いと氣着く時身は既に光明中に居るので。聖人は歎異鈔に於て、一向專修の人に於ては廻心といふ事は唯一度あるべしと申された、唯一念不可思議に氣が着いた時凡ての疑は影の去る如く去るのです。不可思議を感じ無いのは、即ち佛智を疑ふ横着の考てす。故に疑惑和讃を繕けば
不了佛智のしるしには、
如來の諸智を疑惑して、
罪福信し善本を、
たのめば邊地にとまるなり、
佛智の不思議をうたがひて、
自力の稱念このむゆへ、
邊地解慢にとまりて、
佛恩報ずるこゝろなし、
杯と言はれてあります、即ち此の不可思議が信ぜられた時は直に攝取光中に入る、此世に在る間から身は既に光明遍照十方世界なのです。さりながら不可思議の信仰を頂いたからとて、世に在る間は前と同じく悪心は頻りに萌す、或は疑ひ或は迷ふ、深く懺悔すへぎてあります。けれど一旦御慈悲を仰がして貰つた後は亦直に其所へ反へれるのです。此の信仰があれば人生上に處するにしても、一として自分の力ですることとは要らぬ、凡の行ひ、凡ての仕事が佛力で心易くいくのです。故に或は常行大悲とも申すのです。今日は「化身上」卷を御話致したのでありますが、どうも廻りは遠くなつて長くならました。之より例月の如く信仰談話會に移る事と致しませう。

私は從來雜多の苦悶しましたか、近頃は精神一變して漸次安樂になります尤も時々多少の煩惱はありますが、概して言はゞ丁度窮屈な小天地を脱して廣浩たる快天地に道ぶ心地です、そして聖教の救濟必定とは、大凡此の有様を意味するのであらうと思ひ、倍す如來他力の深廣なる慈恩を感謝すると共に、同感求道の友を慕ひ、相互の胸襟を打披きて所懐を白露し、相携へて如來の慈光を仰拜したい念が發りました。就ては私従前求道の心得はありましたが、特更心根を動かしたのは人の眞摯なる信仰の實歷を直聞し、又は記事を讀むことでありましたから、今度私も自己の經歷した事柄の良劣に頓着せず、感觸した儘を求道誌に便りて大方の道友諸兄に告白することにし、文は可成簡略にするため書き捨てにします、
私は薩摩喜入村に生れ、幼時より衣食に左程不足を感せず、學校教育も當時相應に施されたから是れも不足とは云はれぬ、身体は生來極く強勝を質てなく、多少神經過敏で短氣であ

つたが、田舎の山海で自由氣儘な運動した譯か、先づ健康を保た故に精神的不自由さへなければ此等外形物質の満足に由りて楽しく生活するは當然だから、精神の苦樂を辨す可き情意の發達猶ほ幼稚な時代は慥かに私は愉快なる日月を暮らしたと想ふ、然るに十才頃より、そ、ろ、祖、母、と、父、と、母、との感情の不融和に因る家内の波瀾を見て漸やく不快であつた、勿論其れは家内に限られ敢て家外に及ぶてはなかつた、私が家庭より受く可き快味も幾分か此れがため減削された筈だか、猶ほ各自が私に對する愛情は各自相互間に於けるよりも深かつた、就中母が最も次に祖母であつた、父は屢私を苛戒した、尤も當時私の亂暴の行狀を鎮撫するためだとは云へ、父の性質が然ふてあつた、元來父と祖母は母よりも嚴酷な性で、母は溫柔であつた、私は最も父を次に祖母を畏れて、母には寧ろ押れて居た、斯かる家庭の風波か十才頃より吹き始め十六才頃風いだ、爾后順調して今日では當時の影も見えぬ、兎角五六年は其風波に揺られた、十才頃は子供心で何の配慮なしに駆け廻る時だが、私は夙く斯の不穩を慨き色々鎮靜の工夫を案した、けれ共素より微力の事故敢て効がない、唯た小な胸に藏めて時機を待つ可く苦痛を忍んだから胸裡は爲に忙錯した、群童と遊戯するにも學校に於て生來の激氣が余程減けた學校や諸所での物話や書物の中でも、古來忠臣孝子の傳話や家庭の美談等に耳目を傾注したのを見て、當時私の心情が察せらるる、然し善良な私でないから、年を経るに従ひ本來の缺點が追々見出されて、今日に及んでも猶知りながら實踐か出来ないとは澤山あつて、常に自分を責めて居るが、學校

苟も進歩發達を阻害するものは勿論、遂には實際然らざることを知りながら疑念を懸けて悔恨の材量となす様になつた、神經爽快な人には左もあるまいが、私の如き神經急劇な者は遂に斯様な邊まで想慮するに至つた、欲が熾んになればそれ程不足が見えて來るのは誰れても經驗する當然の事實であらうが、私は過欲大望を満足するに要する智能と身體力の修練を案じた、同時に過去に於て其修練が尙ほ不足である寧ろ妨害となり損失を招くと想到し且つ疑惑し、悔恨措く欲はず憂愁人に語る能はず、自ら己れを己に訴へ、而かも決する能はず遂に願虚實に言絶の苦悶をした、此れ既に一種の精神病だ、併し本心未だ亡失せしにはあらず、唯だ迷妄念の黒雲に遮られ其の働を休止して居る様な氣持がする、過大な欲望は危険だから中度を守りて満足せよ、過去を追ふよりは將來を諫めよとは、慥かに本良心の忠告であるのだか容易に其の効がない、斯くの如き煩悶は自分が苦しいだけで必ずしも他人を妨害するのではないから、他人は笑ひ憐むとも悪怨する筈はないか、成る可く人に窺はれぬ様に人の害をせぬ様に心得て人目を避けた、又力めて其の苦癖を改悛せんとした、或る動機により一時は強制せられて居ても、尙ほ其の根元は抜けないで復た發り勝ちであつた、斯く過去を悔恨するの念に凝り、遂には彼是精神忙殺するため元氣を失墜し、機會を逸し、計志を定むるに由なくなつて、大損害を蒙つては尙ほ重復な心配悔恨を生じ、繰返繰返して數年は心配から心配に輪環した一の連鎖を作つた、前後左右今昔の事凡ての周圍の物か悉皆煩悶の種子であつた、而かも學課の事に就てはなかつた、

の課業は割合に怠らず人並に小學と中學だけは卒業した、而かも其間他人學友の知らない煩惱をしながらである、然るに他人は私を慰むるに物質的富裕を以てした、成る程比較的物質上の生活に不自由ないのが多少慰籍となつたが、逆も精神の不平を償はない、然し父母に向つて不孝順な念は容易に懷かず、専ら家内を和睦せしめて善美の家庭を作りたんと熱望し、己が身を修養して父母を悦ばせようと思ふた、父は嚴酷な性であるが又非常に讀書好きであつた、故に私も請ふて中學に入り普通教育を受けた、既に此の頃は家庭の風波は靜風して何にも氣遣ひはない、父も著しく愛して呉れる様になつたが、年來の苦慮により神經は愈々過敏となり肉体まで其の影響を受けた、

此の十六才頃までの家内に就てのが第一種の煩悶にして、其后二十一才頃までが第二種、其后今頃までが第三種で各種性質が異なり煩悶を経た、第一種は小學時代第二種は中學時代に伴ふた、第二の初期私は非常に榮譽心に熱く、博學多能な人物となり立身出世して過去の苦悶を償ひ、未來の安樂生活を圖らんと狂する如く計企配念した、勿論學問の眞趣味を望むの外に虚飾形式の譽れを貪りたい余念があつた、其の虚飾と云ひ形式の譽れと云ひ固より道德の敵で良心を害する邪魔物だが、屢勃發して困つた、其れ等が即ち神經急敏の徴である、何でも敏速な業を好み、大望を標にし大勉強の効果を獲たい、大に進取の氣を培ふべしだ、暫時も遲滞して氣を弛めてはならぬと云ふような氣質になつた、故に譬へ丁度で満足す可き事物にも、猶ほ不足を感じて飽く所を知らない、

常に私は想ふた、若し我れを此の苦境より脱せしめば學業の如きは非常に樂く、多大の進歩するのだけれ共、殘念だ斯かる苦悶がある最中でさへ左程學課には困難は感せぬのだから況んや平氣で居ればと、各種の苦惱が猖獗な時は精神快暢として進退維れ谷まり、重荷を負ふた様に縛られた様に苦しかつた、心身を極めて清潔にせざれば智能の啓發を妨げ記憶を弱むるものと憧憬するようになつて、可成滋養食し清潔の衣服を撰み綺麗な室を好まねはならぬ、汚穢な物に接するとそれが己が身体組織を害して内部諸臟、特に腦の神經機能を害し、記憶を害し、人間の役に立たぬ様になると妄想して、塵埃嗅氣や、粗造の室や、粗食や唾等、一切耳目五官の感觸することは勿論、意想の上にも種々の迷想を浮べて嫌惡したから、ますます身心の營養を害した、就中私が九才頃から十四五才迄に、二三間又は五間位の柿木から三度、絶壁頭上より一度墜落した、其の他にも僅な怪俄はあつたが此れ等が先づ著しきものだ、其の落ちた當時は幸に天命で死なかつた、早く痛さへ癒れば宜いと喜び父母には、私が不注意を叱責するを憚りて秘した、敢て醫治をも受けず自然に放棄して癒つた事を十七才頃煩悶最中に想起して其勢力を加へた、彼の時の怪俄が身体の健康を害し大切な腦を鈍めたのだ、記憶も幾分か減ぜられた、自分の不注意で彼の怪俄に遇つた、然らざれば己が精神力は尙ほ發達したに相違ないが、嗚呼悔やしいと恨憾數年に亘つた、而して過去の事は仕方がないと諦めた頃は、然らば何ぞ斯かる回復の見込なき無益な心配を續けたらうか、早く斷して將來を計畫す可きであつたが今や既に時

後れたと悔愁配慮順繰して心配から心配に移つた、馬鹿げた苦心を敢てしたのを諸兄は定めて絶笑さるゝてあるう、煩悶の熟した頃以後は習慣に執着して配慮願慮せざれば何か物足らぬ氣持したから、嫌いな煩悶でありながら今迄伴ふた縁で俄かに絶交するのは涙であつた、又強いて缺點を探つて配慮し損害の疑懼を抱きて氣遣ひを招く様に見做し思ひ做し勝ちであつたも理由があるのだ、即ち良い事は矢張り良くて缺點する憂は少いから、先づ缺點を探りて改良し、全般を整理して利益を多からしむるため可成事物の缺陷を偵り、其の方面に配慮する癖を生じた、勿論愚迷極まることだ、事物は必ず一利一害相伴ふ可きものなるを合點承知が出来なかつた、益利を欲して配慮するもの、實際は寧ろ大に損害を蒙つた、以上は第一第二種煩悶の一斑であるが、第三種のも此れ以上惱んだ、此れ等の煩悶のみで少しも慰藉がないものならそれこそ煩悶詰り斃れたに相違ないが、辛かに其の危機を免れ今日に存命し心身を維持したのは、度々制止の試験に落第しながら、尙ほ將來何時かは斷然制止するから、其の曉には非常に安樂になるとの希望で聊か勇氣を興したと、其上は學業を勉強して志望を遂げ立身す可き榮譽の希望と、多年の煩悶中一時の浮快を貪り幾分の疲勞を慰醫するための菓子煙草牛乳の如き肉體欲を満すべきものであつた、又其れ等に要する金錢に左程不自由なきことであつた、然し此の如き飲食道樂は寧ろ害であつたが其當時は止め難かつた、其の他俗人の以て快とする俗事物は勿論、勝景佳光や花月と雖敢て私の耳目を慰むるに足らなかつた、友人と接しても眞に快活親密に交

り難かつた、水をも洩らさぬ様な友人が欲しかつたけれ共其の義も叶はず、幾分か意思が融通しなかつた、自分親切を竭しても人が其志を受けて呉れず、自分も又他人に缺禮し虚詐の念言行もあつた、素より克己の精神に乏しく罪惡と認む可き行蹟歴々と見出されて、一向面白くなかつた、而かも斷念放棄し兼ねて自己を責めたから、先づ猥りに他人を評撥せず

に自分の身を修む可きだと心得て居たが、上記の煩悶に紛れ其心得の如きもなかなか満足に實行せられなかつた、斯かる大煩悶しながら二十才頃迄は求道心も宗教の必要をも感ぜなかつた、佛教特に眞宗は私の郷里にも布教されてあるから、其香ひ位は嗅いて居たが、別に信拜の念も感味もなかつた、但し幼時佛を拜めば極樂に往き何にも不足なく、然らざれば地獄で苦むと云ふ譬話を聞き、然らば拜佛す可きだと思ふたは子供心であつて、八九才後は畢竟佛教も勸善主意だから心を正し善を爲せば必ずしも佛を拜するに及ばない、極樂に往くのだと思つて左程好きでも嫌ひでもなかつた、尤も當時儕友の氣風が然ふてあつた、佛教は老人儒者の信す可きものであつて青年學生の近く可きでないと思つたが、第二種煩悶の末期より追々求道の念と宇宙人生に就ての疑問が起りて第三種の煩悶を誘導した、

須らく、天意に遵ひ眞理に憑つて安全に生活したいため、天意に忤らない無礙の道と繩とを求め搜した、けれ共實際吾目前には澤山の不審か鬱積して、逆も道か解りそうもないか、又其の儘放つて諦むるにも忍びず、何ふせ是れは吾人をして考究せしむべく命したのであるから、難義ながらも先づ宇

宙の哲理を案じて人生の意義を辨證せねばなるまいと、生意氣でもあるが又實に慙むべき觀念が發つた、此の觀念たるや常に疑惑の雲に遮られ、煩悶を伴ひ、幾多の蹉躓を重ねて昨今に及んだ次第であるが、前期の煩悶は此の時分から漸次退散して遂に眼を絶つた、大概人は宇宙人生の状態に就て觀念し或は疑ひを懐く時期に際會する等だ、私は四五年前より頻りと其觀念に耽つた、宇宙創成終果の事に就て、人類生死萬物變態の模様を就て、或は吉凶禍福の由來に就て、其他雜種の所世觀に惱んだ、察ふに人倫道德乃至萬般の事理は古今時代を異にするに従ひ、東西邦土の異なるに従ひ、其趣を異にし是非を諍ひて甲乙の反謗絶ゆることなく、一致共通の定道未だ決せないのか憾みてあつた、しかし斯の有様か實際は吾人を競はせて智識を啓進し情意を達せしむる所以で、即ち吾人を順導する天の恩恵手段であると思へば概くに及ばぬ、矢張り斯の調子で暮すのが本當だろうと思ふて見たが、一向氣が濟まなかつた、

希くは天に情あつて全天下の人類群衆の心を整頓して、一貫普通すべき融和の理想を懷かせて諍論なからしめば、其處其時が極樂黄金世界であらうが、残念ながら其の望も覺束なく、聊か天の無情を嘆じ、此世の味氣も減つたもの、其の儘で朽ちるなら尙ほ更辛らい、何れ極樂があるには相違あるまい、目下煩惱無明の故に其好景が映らないのたろう、行末何等かの手段で一度は救済されねばならぬ、元來己が腦が鈍いのか、修養が足らぬか、何れにせよ、實に己身は微弱淺薄である、善知識者の善導に依らねばいかぬと、覺悟した

のは既に此の頃であつた、故に求道の念は熾んであつたが、前に陳べた如く異趣義の教道中其の何れに歸向すべきかを判定し難く、選擇に苦んだ、偏へに安全公明の道を求めて居たから、幸に天が私の一切念慮を司令して、爾の道は是れぞと選命して呉れたら、心機快決亦餘念なして其の道に歸すべきも、實際斯かる靈告奇徴あるべくもあらざれば、何うせ世の常態に準ひ己が心で適宜の道を辨えねば、外に仕方はないものとした、空氣や水、其他衣食住に需用する、一切の事物は全世界を通じ大凡公平相應に施與してあるが、精神司導の法は其の軌を異にし、東に佛儒西に基回あるの外、多數の凡教もあれば、無信教者もあつて、趣旨組織の一致なく、雜糅翻語して居るが、此れでも天意であるたろうか、然り是の如きが愈人生の美を致すのだと諒納するか、或は古來の道教に便らすとも、當時相應の道則を各自の境遇や情意に適從した常識に依りて設けた方が颯張りして處世にも何の不自由ないではなからうかと思へば、一往安心決着した様であるが、尙ほ生死に就ての疑念が絶えず、敢て満足を得られないか眞の安住所はまだ遠慮なるかな、向ふ十萬億里の旅程であらうか、然らば人生僅か五十長くても百才を超ゆ可からず、況して己が知脚を以て其の遠路を如何せん、噫人生求道行路の難さや、斯様に道に苦むこと數年、彼を築きては壞し、此を縫ふては綻るのが常態であつたから、何れの宗教の價値をも疑て必要を認めなかつた、中でも佛教は手近にあつて影響された譯か割合に縁があつて、疑ひながらも何となく戀しく有がた味も感して來たが、基督教と云へば其の教味をも鑑別せずば擯斥

して居たのは、全く私の陋見であつた罪を謝せざるを得ぬ、然し當時は先づ氣好に任せて佛敎を重んじ、及ぶだけ將來は其の敎理を研究して見よう、又力を竭して弘通を圖り度い、佛敎界に人材が欲しいと云ふ者があつたが、其の裏には何ふも佛敎は既に老舊廢物だから吾等に不適だ、現今では外聞も卑しい、且つ學業を妨ぐる恐れがあると云ふ異心も發つた、しかし漸々信したい方に引寄せられたが、其の煩悶最中には、信敎を撰ぶには其敎理に注意すべきものであるから、遺傳や外形の儀式などに拘泥してはならぬ、公正眞實の眼で鑑識して去就を決す可きである、誠の信は夫れに由て獲られるのだと惟ふて、佛敎でも耶蘇敎でも、或は其れ等の敎以外に未發覺の眞理があるかもしれぬ、何れ歸すべき道に向へば宜いのだとした、斯くて其の歸着する標を見出さず、常に動搖せられて寧靜の時なく、恰かも群雄蜂起して内亂するも之れを鎮定する援群の雄が出なかつた、私の殆んど全念は此煩悶に費された、其の苦し加減は譬へるものかなくつた、加ゆるに本務の學業も、其の親や友人の知らない、大煩苦に妨害せられた、中學を出る頃から斯の大煩苦が始まると共に、名利心が倍えて見せかけ根性があつた、受験者が多くて程度が高くて、評判の好き學校を撰つて望んで居た、而かも勉強せず合格して見せようと云ふ様な卑劣な考えがあつた、如何にも迷ひの跡は憫笑に堪へぬ、人生問題に苦んで居ながら左様に大望を欲するは以ての外の過ちだ、尤も人生問題に就てのは早晩必ず消さるゝから、其の後は全念を學業に注げば、今では過度の様でも後は何の苦もなく成し遂げ得ると云ふ望み

があるからであつたが、其望が一向的にならなかつた、此れ等に就ての心配が集合して從來の煩悶に加勢したが、學界に就ての心配は僅かなもので、煩悶の大部十中八九は人生求道に就てのであつた、此時期は多く晝夜を徹して觀念煩悩した、實に言亡意絶の苦を受けたが、亦言亡意絶の樂を得る所以であつたか、

以上亂調子で數年を経過して、本年五月下旬に及んては更に勢ひ猛り狂亂して氣絶する程苦しかつた、矢張り從來の人生問題が主で、復雜混合した心配が副になつて久しく齎らし全念を注いで頻りに解決を期待するけれども、今に何の甲斐もない、望みを抱いて將來を待つにも程がある、最早望む力もない、今が無限地獄である、進退維谷迫した、迎も迷惑は除かれぬ、問題は解決されぬ、萬事既に窮した時は、其の廿七八日であつた、廿八日は日曜で近角先生の講話を聞いたか、それも余り面白く感せず、矢張り鬱鬱して、其歸途歩調か澁つたことは今だに記憶してゐる、それでも他般の事物に對してよりも遙かに氣味よく聴講した、此時分は特に目耳の觸るる何物も嫌惡した、其晩だ、例の煩悶に溺れて全身發汗衣を浸す最中、頓に心機一變した感覺があつたから何ふも奇妙だと頭を擡げると周囲は炳然朗耀して一個の像が現れて居たが、當時は言ふへからざる靈感に打たれ、全意識を奪はれたから何とか讚歎の聲を發した筈だが確かに覺えない、けれど共正しく聖釋の靈彩として直感したなり一點の疑念もなかつた、音聲を聞く筈でないが、心を使りて像が私に通告したことが、恰かも聽覺によるかの如く感せしめだ、其の意味は一

切佛の救済に任せ自力を怙む必要なしてあつた、是れ洵に絶世の妙瑞靈兆として難有い、私は生來幻怪の説は信じ難い性分であるも、此れだけは如何しても動かされぬ、剛く誠信して居る、尤も神經作用で平素意識にあることが現はれたとしても尙ほ有がたい、私は以後蘇活した、全世界の富みも此瞬間の妙感に抵らない、自力を捨てよ、絶對他力如來を篤信するの外はない、從來私は自力と他力とに就ても色々是非を案じて、默念獨考幾多の苦慮したが、結局する所一切皆他力作用である、自力と稱へたければ稱へても宜いが、私は近頃自力と稱へたくなくなつた、彼の靈感以後か實に喜悅極まり、特に初め數日は全く世界の光景が空前の美を裝ふて見えた、何一つ氣に叶はぬ物はなく、身體も甚だ輕快で、已の身の様ではなかつた、恰も天空に懸つた心地がした、思想も飄として快決せられ、少しの滯滯悞悞もなかつた、此の精神が即ち極樂を得た態であると想ふた、譬へ試に煩悶しやうとしても出來なかつた、其後今日まで當時の感念は脱せない、けれ共時により雜念あるが左程惜しくもない、實に不思議だ、如來は一切攝取不捨だ、要は唯だ信するにあるのだ、否自分が信するにあらず如來が信せしむるのだ、一から十まで悉皆如來である、他力其儘である、以前は自力と云へば進歩主義で元氣らしく外聞も好いが、他力とは或る二三人の力を合せた位のものとして軽く見下げて居たから、信頼の念が起らぬのも無理はなかつた、何ふも他力は覺束なきものと感認して居た、如來が濫りに衆生を迷はす等がない、一時煩惱に困むのは得道の縁で佛敎に一切衆生は本來覺なるが故にとあるではないか、救済必

定だ、此の三世は輪環順次して無窮だ、佛は無始無終と説いてあるではないか、人生剛たそうて軟かいもの、弱わろうてあるが強いものだ、私は軟弱淺微の極地に陥つたが、如來大他力の信によりて金剛至大の氣を享けた、死忌むに足らず、貧賤褒貶敢て意を煩はすに及ばない、一切萬物は吾れと一體同如であると觀る、然し動もすれば理論を好む癖があるのが妨げとなる、斯かる自力は要らぬ、總して以て如來他力に托して自分は存知せぬ方が眞の智慧だ、往時は強いて理論解決を望んで苦んだが、今は解からぬ所に妙味を見出して安心だ、以上 予が意向の一般を略らした草したが、何ふも思ふ様に盡さぬ、

引接の光明

上野 啓造

思へば私程愚かの者はない、千仞の絶壁に彷徨して居たのです、平安の道のあるのがどうしても見へなかつたです此度は不思議なる御力によつて平安なる道に出して頂きました、一體私は佛敎主義の家庭に生れて、幼少の時から御念佛を申して居れば、佛様は結構な極樂へ連れて行て下さると母から訓されて、佛様は有難い御方と思つて、佛前て御經を讀た事も度々ありましたが、十二三歳の頃から粗略になりまして、父母から無理に謂れて拜禮したり法話を聽て居りました、

十八歳の時から私の思想や境遇は全く一變したのです、此時代には宗教によらなくとも智識さへあれば道德の實行には差間がない様に思つて居ましたが、幼少時代に宗教的感化を受けたことは深か、つたので潜伏觀念となつて居て、理屈で壓伏出来ない處がありました、今は學問をするが第一であるから老後に味てみよ、など、思つて居ました、

昨年秋に上京してからは讀書に忙しく日を送つて居ました、本年の一月突然父が病に罹られたのです、私は此時熟々と人生の果敢ないことが旅窓の身の一人深く感ぜられ、幼少時代のことや家郷を出立の際訓されたことが胸に浮んで、何となく佛前が懐かしく、法話を聴たくなつて所々と尋ねた末に九段の説教所へ参詣しました、何となく心持がよくなりました、其中に父の快方に向た知らせが來て飛立様に嬉しく思ひました、

兄からの手紙に近角先生の著述の信仰の餘瀝は實に難有い本だから、熟讀して送れと、私は早速求めて一讀しましたところが、思ひ當る事が多く再三熟讀しました、これによつて求道心を起さして貰ひました、其後度々近角先生の御講話を聴かして頂きまして、佛陀の御慈悲といふが段々分つて來ました、其中に試験が近づいて心には思いつ、疎畧になり、試験が済てからは氣樂になつて遊て居りました、四月の十三日の夜散歩の歸りに或基督教會堂へ勸誘に任せて這入だので、其時一人の牧師が私の傍に來て種々様々の事を説いて聽かして、懺悔する様誘導された、私は面白半分にも無い理屈を並べて争ふて出よ、とした、其人は私の袖を引て君は御

信念は全く霧散して、自己の邪見が益々知られて、心中には悲鳴を聞くばかりで、求道學舎で聴いたり、夜中冥想するときは御慈悲に接した感じかしますが、其時のみで歡喜の心が起りませぬ、寧ろ苦惱が増すのみで闇黒の裡に迷ふて居ました、其中に病か段々増進してきて、自分は全く肺結核と思つたのです、前途の望みは絶へ益々死ぬより外はないと思ふたら色々後悔するばかりで、床の中で泣て居ました、老少不定とは此ことだと思ふた、心中には一點の安心する處はなく、前途は渾沌として只煩惱して居ました、萬籟は全く眠りに入り、風の窓打つ音や、齒軋や、犬の遠吠が言ふに言はれぬ恐ろしく聞え、時々刻々と闇黒界に沈む氣持がして、私は苦しみの餘り一生懸命に念佛しました、刹那に御佛の御慈悲が身に染み渡つて只勿体なく有難く、胸一ぱいになつて合掌して念佛して居ました、其中に段々何時の間にか煩惱は全く消え、死でも生でも成る様に任ず氣になつて、大風の止むだ心になり、何時の間にか眠に入りました、翌朝眠りが醒めた其時は、四邊が何となく穩て實に言ふことの出來ない良い氣持がして病氣も全く治ら思がして御慈悲を感謝しつゝ床を離れました、醫療を乞ひましたら氣管枝加答兒て程經ぬ中に全快しました、私は眞個に唯事とは思はれませぬ、偏に佛陀の御手廻しと思ひました、今日は不思議なる佛陀の御力によつて働かして貰て居ります、

* * * * *

歸りになつたらよく考へて御覽なさい、君の口と心と相違して居る事が分ります、後日是非訪問して御話したいと、懇切に私の住所姓名を尋ねましたから皆偽て逃出して、家に歸て床に就きました、何とも心が谷めて眠られず、考へて見れば彼の人は眞實に私を氣の毒に思つて言つて呉れたのに誠に申譯ないことをしたと思ふた益眠られず過去の行爲に逆て考へてみるとこれどころではない、誰にでも話されない様な事ばかりで自己の不完全極まるものだと、いふことが初めて氣付きました、自分の力では良い行など少しも出來ない、今迄は誠に申譯ないと思ふた、此様な心が起つたのは佛陀の御蔭だと思ふたから御慈悲がわかつた様で、急に有り難い感がして御念佛を申して居りました、翌日になつて今日は彼の人は自分を尋ねて居るだろ、若し道で出逢ふたなら何と謂譯しようと思ふたら、外へ出るのには恐ろしい氣がして終日鬱々として考へて居まして、彼の心に謝罪に行くことに決心しました、それから自分の方が良くなつた様の心持がして、偏に佛教を聴て居た御蔭だと思ひ御念佛を申して、何をすることも總て行を謹みて、時々九段説教所て講話を聴て誠に有難い感がして、自分では信仰に入つたつもりで其當時は心が洗い去られた氣持がしました、其後試験の成績も知れ色々と身上に嬉しい事が續いてからは沸騰湯の冷える様に消失して、又相變らず罪惡を犯して居ました、今日考へると何とも申譯かなくて頭か上りませぬ、暑中休も夢の間に過し、九月七日に上京しましてからは脚氣に罹り不快で勉強も思ふ様に出來ず、憂鬱として日を送て居ました、内心を深く顧る、ところが從來の臚げな

感謝之披瀝

一 謹啓、時下寒威次第に相増し候處、先生には益御清康にて弘法のため只管御靈力の御事と奉進察候、

借て今夏上京仕候節には、幸に拜眉の榮を得、親しく御懇切の御指導を給はり、御蔭を以て大に信念を固め候段誠に喜ばしく御禮は言葉に盡しがたく候、願みれば昨年の初と覺え候が、一友人より偶然「求道」を示されたに、何となく讀て見度き氣になり直に之を開けばかれて渴望致し居候處のもの、誌上に滿ち居り候やう感じ嬉しくて溜らず、携へ歸りて幾度か熟讀玩味いたし、初めて幾分か迷の雲縹たる様覺え候へ共、それは唯一時の事に、再び元に戻り又々煩悶の中に日を送り居候處、本年二月初旬拜眉の節昨年未と申上げしは間違に候、寄宿舎にて煩悶中突然一道の光明に接し申候、然し其當時は左程にも感ぜざりしが、其後幾度かかゝる經驗を重ね候に從ひ、次第に其意味明瞭と成り、その雖有味を増し來り候様相成り、昨今にては是ぞ不退の信仰ならむと自ら信じ候様相成り日々實験いたしかく迄に變化あるものかと我ながら驚き居候、之を小生が職業に就きて申すも、從來は教育上の難問題と考へ居たりしもの、今は刀を迎えてと迄に行かずとも、左ばとに大なる困難なく解決出來申候、例へばかの中等學校にて屢演せらるゝ同盟休校の如き、今は大した大問題難問題とも考へ不申候、是は小生も二三度出會候故其感最も切に候、又小生の現今從事致し居候寄宿舎の監督の如き、豫て中々困難なるものと考へ居候て、先きには日々經驗を積み居候にも拘はらず如何にして生徒を統御訓育すべざるか、少しも統一したる方法を知らず、單に先輩の採り來りたる方法と教育學の原理といふものを頑守致し居候のみにて、いはゞ死物同様の法則に盲從いたし居候ひし故、奮つてその監督の責に任するの勇氣なかりしも、今は何となく胸中に成算出來候様覺え、日々の事務も唯努力のみにて心中には大なる心配は殆んど無之なり申候、

是等は何れも信心の現世利益と申すべき、

大なる問題はかく解決出来候へ共却て日常の鎖少なる事件はむしろ従来と同様なるも可笑しく候、而して如何にしても解決出来ぬは煩惱の問題に候、こは益々

色々の事上御清讀被下候も恐入候次第何卒御容赦願入候、重ねて申上候小生の今日ある偏に佛陀の賜物と感謝に堪えず候、實に小生は先きに友人より「求道」を示されざりせば、今日にいたるも尚ほかの煩惱をうけ居るならむ歎と存じ不

十一月二十日

牛窪徳太郎九拜

謹啓譬へ方なき高恩を蒙りながら御機嫌伺も仕らず、無禮の段平に御海容下さ

大恩は念佛より外に善なく、念佛より外に急なる急務は一つも無之候。無限

の空間に五大洲を比し無限の時間に萬歳を比すれば大海の一滴よりも尙小

是も善には相違なきも無量の壽と無量の智光と無量の慈光と無限の力を以て

是も善には相違なきも無量の壽と無量の智光と無量の慈光と無限の力を以て

是も善には相違なきも無量の壽と無量の智光と無量の慈光と無限の力を以て

是も善には相違なきも無量の壽と無量の智光と無量の慈光と無限の力を以て

き南無阿彌陀佛。さて大恩が如何ばかり罪深くあるかを語るも置き候間御一覽被下度候。

友の厚情を知らず、おもはず、たゞ三味線ひいてうかれきわやうな罪深い大

大恩は他の友に氣つかはれし時には尺八ふいて居たか食物に性根奪れてゐたかもし

に相害するの痴劇、悲劇、滑稽劇を演ずる有様を不斷照覽したまふ如來の大御心

は如何あるべきか、大恩はたゞ如來の大恩の願力により、如來の大御心を奉體し

「汝等勿抱臭屍、種々不淨假名人、如得重病箭入體、衆苦痛集安可眠」

「無比無垢廣清淨、衆德皎潔如虛空、所作利益得自在、故我頂禮彌陀尊」

「安樂國淨土、常轉無垢輪、一念及一時、利益諸眾生、」

「南無阿彌陀佛、今日只今老病死苦に泣きつゝあるもの幾千萬、食に泣き窮に亂

ず、無障無碍の身即佛身となりての後、此土へ歸省可致決定いたしおり候。是か果しとぐるには、現世に執着せず唯々念佛申すばかり外に何の事も無之候。斯くおもひこみ居候間、徒に現世のみ祈りて是も未來永遠を期せざる輩、願作佛心なき輩を見ては事おかしく候。佛號むれと修すれども、現世をいひの行者は、是も雜修と名づけてぞ、千中無一とさしはるる。此御和讃は毎日不斷稱するやう相成居り候。其世は永く止住執着して居るべきにあらず候。大愚は未一度も參らざる淨土は念ぎ行きたき心も起り不申候へども、さりとして淨土の莊嚴及其國の人の笑をらしめられ此土の穢汚、人間の臭穢悪性をらしめられたる身は久遠劫來住みなれたる畜里もあまり戀しからず候。淨土にもゆきたし婆娑にも居たしといふ心地に候。畢竟は大悲の風の吹き着くるまゝに任すのみに候。南無阿彌陀佛、大愚も此世で今一度愚師方之御膝下にてしみじみと御教化いたしき度く念じ居り候。右日頃の所感告げ奉ること如此に御座候。實は田中正榮の書状をうけ、大愚の罪惡を感じたる其當時より今日に所感をつけ申さむ、明日は御しらせ申上げんとぞ言ひくらし今日まづも永引き候。

十月十七日

塚本大愚

His face is growing sharp and thin.
 Alack! our friend is gone.

Close up his eyes; he up his chin:

Step from the corpse, and let him in

That standeth there alone,

And waiteth at the door.

There's a new foot on the floor, my friend,

And a new face at the door, my friend,

A new face at the door.

(Thennyson: Death of the old year.)

雜 錄

生死巖頭に立つの時

寺本 婉雅

左の一編は寺本氏の所談を録したるもの、些の誤謬からしめむと勉めたるも或は記者の耳に萬一の過失なきを保すべからず、依て之を附記するもの也、

近頃世人が物質界上の問題に飽きて、人智の進歩と共に思想の發展に従ひ、内省的考察に趣き人類の精神歸着に注意するに至りしは、道德宗教の進歩上最も喜ぶべき現象の一なり。内省的考察とは一は哲學上の研究となり、一は宗教上心靈に於ける考察となり、而して哲學上の考究にては人心の根底を定むる能はずといふよりして、所謂宗教上の信仰問題を頻りに云爲するに至りたるなり。即ち信仰問題の盛に興起したる所以は、人類各自に自己の罪惡觀を適切に感じたる其反映なり。

然れども信仰と謂ふ事は容易に自白も爲し難きなり。何故となれば、若し自白するとすれば、既に各個人中の思想其儘を言ひ表はす事の出来難き場合あり、同一信仰と言ふも其の程度に於て淺深の別ありて、絶對より見れば同一ならむも吾

人に於ては等しからざるなり。若し單に信仰の問題と言へば、吾人が既に神若くは佛等によりて、自己心中に確固不拔なる安住を得たるかの如く思はれ、亦自己もかく連想するに至るなり。されども信仰は人生窮極の心的現象なれば、決して然かく輕々には言ひ得易すからざるものならんと思はる。吾人は信仰を表白すると謂ふは、甚だ其當を得ざる言語なる如く考ふる者なり。既に信仰と云ふ以上は、精神上に何等かの歸着を體得したる以上のものなれば、信仰其物に對しては絶對的に批評の言を挟む權利は無きなり。然れ共信仰の表白と言へば、表白其物、即ち信仰なる一實體の余影を捕捉して、其餘影に對して各人の信仰の眞不眞を批評するは爲し得べき事と思はる。依つて吾人は寧ろ信仰の投影其物の状態を言ひ表はすの外無きなり。信仰と言ふ事は、罪惡なる吾人の心裡状態に於て容易に之を言ふを憚る所なり。吾人は唯吾人の心裡の奥底に何物か偉大なる力或は人格者の恩寵の投影せるものありと認識せる其心裡状態を表白するに過ぎざるなり。あらゆる形容又は文章上の修辭等を藉らずして、吾人の心裡上の状態を明らさまに暴露せば、聊か其真相の一斑をも正確に表白する事を得べきか。而して其心裡状態の現象有様が、若し夫れ偉大なる實在者、或は犯す可からざる靈覺者と一致し、又は相應する點は於て之を信仰とも名くべく、爾らざれば信仰を得ざる者とも名くべきか。百尺竿頭一步を進め、吾人煩惱の一真相を持ち來りて清淨の明鏡に投影せば、茲に歴然として異彩を發するに至らむ。

自己の一身を死地の境界に置きして沈思嘿想せば、聊か吾人

の心を欺かざる如き誠の道に趣く事を得べく、自己の罪惡が眞實に感ぜらるゝと同時に其罪惡を救濟せらるべき者を豫想するに至るべきなり。然れ共自己の罪惡を感じ或は救濟者を思ふ、斯かる思念の往來する間は、絶對的に自己自ら自己の心を試みるの機會に立至れる者とは言ふ可らず。自己の精神等に就きて種々考察を廻らす事を得るの間は、未だ眞實に自己を生死巖頭に處せるの場合にあらずして、聊か其間に種々考察を廻らし得るの余裕を存せるものなり。既に余裕ある已上は、此の餘裕に依つて罪惡を感じ救濟者を思考すといふは、生死巖頭一步を退きたる第二の地位に於ける心の状態なりと言はざる可らず。眞に進退維谷まるの場合に於れば生の考も無く死の考も起らざるものなり。生死の考の起る間は、未だ自己の力、或は自己の眞價値を試むべき時にあらず。生死の念を起さむと欲しても起す能はざるの時、殆んど無生死の念頭の際に於て、初めて自己眞正の眞價値を鍛練すべき場合に逢着せるものとす。古人が「兩頭を切斷して一劔天に懸りて寒し」と言へる心的現象は、斯かる場合に自己を投じて、一大勇猛の精神を以て生死問題を處斷せんとする状態を言ひ表はされたるにあらざるべきか。即ち生を考ふるの暇も無く、死を決するの暇も無き場合に於て、悠々として處し、湛然として一切の事情に迷はされず、若然一波も立たざる水中に明月の影印したる如き心裡状態ならんには、萬事に動かされず、動かさるべき物縁を絶ちて、明々白々に自己心中を自己自ら觀じ、以て超生死的信念に任じ、茲に初めて自己を處するの微妙なる方法、一路の解決を泉の湧き出づるが如くに見出し

うるものなり。而して一路の解決が、湛然たる生の考もなく死の念もなき其心裡丹田より現はれたる時に於ては、茲に猛然として外界に對し悠然萬物上處斷すべき偉大なる能力を、自己自ら自覺し來ると共に、生に着くも死に陥るも二者其宜しき道を考察するに至つて、吾人をして意の如くに事に當りて決せしむるの膽力あるを認め來るなり。斯の如き心的状態に安住するを得とせば、かゝる心狀把持者の前には何等の恐るべき敵も無く、又媚び諂らうべきの階級者をも認めざるなり。斯る状態の心理の者に於ては、一點恐怖の念も無ければ茲に差別の念を絶し、遂に一切をして自己の湛然自若たる心と同一様に平等化するに至るなり。先には王候を見て尊嚴の意を拂ひ、後には富者を見て愛欲の念起る、後には死の恐るべき敵を思ひ、前には宇宙萬有の永久不滅の何等かに冥合し又は向上的に進まむとす、斯る煩悶考察の狀等をも一切杜絶して何等の思慮、何等の誘念にも迷はされず、湛として大盤石に座するが如く、東西幾千里、南北幾萬里、茫々たる平原に孤身立つて宇宙を、觀察すると假定したる同一の境遇に住するに至るなり。廣漠無涯の平原に單身孤立して宇宙方有を冥想する時は、心狀極まつて心水中何等の波動をも覺えざるなり。茫然として唯大なる宇宙と心水と一致し、心と宇宙と共に無二融合の境遇に際せば、一切の思慮を斷絶して、情緒も無く推理も起らず、判斷考察等の心的現象を絶し、言語已外微妙なる感に打たれ微妙の味を占むるを覺ゆ、同時に不可思議的偉力に信賴するの念を萌せば、茲に崇高の念起り、感謝の念油然として發し、抑えんと欲するも能はず、思はず

らんと欲するも之に打勝つべきの力なきを自覺す。斯くせるの時自己の心裡状態を何等の言語を以て言ひ表はすべきか、之を明言せんと欲するも吾人は此の眞實の心狀を言ひ表はすべき言語有るを知らざるなり。所謂宗教上の言語をかりて一言すれば、感謝と言ふの外無きなり。既に自己の心水中に明月を窺ふ事を得たるは、自己の光によりてにあらざり、心に映ぜる明月の光によりて心中の状态を知り得たるものなり。斯く感謝の念の起る所以のものは、之を起さしむべき偉大の力の存するを認めたるに因る。此の念起りたる時は即ち自己以外天心に圓滿なる明月のある事を認證するに至りたるなり。花時花を見んとするは既に春光に催ふられたるによる、花を見んと欲するの念己に我が力にあらず、春の陽氣なる他力の力なる事を知り得べし。其の如く虚假不實、罪惡の結晶と言ふの外なき吾人をして、其罪惡に迷はしめず、罪惡を罪惡とせざるに至らしめしめ、亦あらゆる煩惱の愛欲の廣海を泳ぐに際し、時に從ひ機に應じ、悠々たる處置を取り方向を定め得るに至りたるも、即ち自己の力にあらずして必然的に偉大なる他力の先覺者の偉靈の然らしむる處なるを覺ゆ。此の念起る時茲に所謂信仰は自立し、自己を導き斯く爲さしめし恩寵の偉大なるを謝すると共に彌々斯く爲さしめ給ひし力、即ちみ佛なるものを見奉る事を得るなり。要するにみ佛の力を感じ、み佛の恩寵を眞實に感ずる事は、自己か斯の如き境界にありてこそ初めて佛陀の光明に攝取せられえたりと言ひ、自己の罪惡か適切に感ぜらるゝも我を照す光明の力なりとも言はれ、斯る心裡状態の確固不拔なる状態を指して

燈火爐火

靜 觀

『無我の愛』脱宗號

巢鴨無我苑

信心とも或は信仰とも稱するをうべきものか。然れ共信仰といふ言語を漫然使用する時は、所謂一種の信仰病に墮在して、各人に於ける眞實の信仰状態を言ひ表す事を得ざるべしと思はる。信仰と言へば信仰なる言語の外に何等の言語を以てするも、到底言ひ表はし得べからざる絶對の境たる如く考へらる。信仰なる善き名目の下に、自己自ら自己を瞞着し過つが如き弊害に陥る事は、信仰表白者の最も留意を要すべき點なるべし。吾人の所謂信仰と稱すべき心裡状態を形容語又は心理學等の言を以て表白せば、絶妙なる趣味を紙上に表はし得べく、種々なる佛語を以てせば、自由に自己の信心状態を現はすを得べしと雖、そは佛陀と眞實信仰者との間に於てのみ使用さるべき絶對の形容語にして、吾人は未だ佛陀と比較して言ふべき位置にもあらず、又信心不退の境に到達したる者とも認めざるが故に、絶對の信仰界に用ゆべき言語を以て、吾人の信仰とも稱すべき状態を表白するを避けたる所以なり。若し人斯般の如き吾人の佛陀に對する信仰の投影の陳述を見て、種々の疑惑を挾み或は以て未だ佛陀の光明中に攝取せられざるものとして誹謗せらるゝ人あらむ。然れともこは吾人が斯る状態を以て生死巖頭にも立ち、水火の難をも排濟するを得たる其の實驗の余瀝たるに過ぎざるなり。若し此の心狀を以て未だ佛力の光に照らされざるものとせば、吾人は奮勵一番光明の恩寵に沐せむ事を期せむのみ。

伊藤證信氏の實驗は絶對的のものであつて稀有の實驗たることは毫も疑を容るべきではない、そして其實驗を他に傳へるに熱心せらるゝも頗る眞摯である、全体信仰は活物であるゆゑ一たび信仰に入れば何等かの形をとりて顯はれ來るものである、其形が如何なるものであらうとも、信仰の眼よりみれば分かるものである、『無我の愛』の發行及び脱宗のごときも信仰の活動である、然るに世上の之に對する批評がまら／＼であるが批難の聲も左程心に掛くべきでないが、賛成の聲も珍重するに足らない。批難するものも眞意を了解せぬものであるが、賛成するものも必ずしも、眞意を理解して呉れるに限りたものでない。

脱宗を批難する者は宗派を重んずる立場より見たる者にして、隨分君が所謂我執より誤解するもあらうが、賛成する者にも、宗内の弊害を嫌ふより唯痛快なる舉として亦一種の我執より同情を表する者もないと云へぬ。全体君自身も認めて居らるゝであらうが、脱宗夫自身は左程のことでない、君の宣言せらるゝ如く、其信ずる處、親鸞上人の本旨に協はゞ、中に居りて其信を宣傳するも一策である。今日の宗派が、脱宗したからとて非常な威壓を感ずる譯でなし、生命を培して羅馬教會に反對した古とは大に異りて居る。其點に至りては、世人

脱宗を批難する者は宗派を重んずる立場より見たる者にして、隨分君が所謂我執より誤解するもあらうが、賛成する者にも、宗内の弊害を嫌ふより唯痛快なる舉として亦一種の我執より同情を表する者もないと云へぬ。全体君自身も認めて居らるゝであらうが、脱宗夫自身は左程のことでない、君の宣言せらるゝ如く、其信ずる處、親鸞上人の本旨に協はゞ、中に居りて其信を宣傳するも一策である。今日の宗派が、脱宗したからとて非常な威壓を感ずる譯でなし、生命を培して羅馬教會に反對した古とは大に異りて居る。其點に至りては、世人

は少々宗派を買被つて居る。されど傳道に便宜の爲めに出るのも亦一部を警醒することも出来る。迷情の四句は四句皆非なり、悟情の四句は四句皆是也。君が現今脱宗するも傳道の便宜の爲ならば、他日亦喜んで傳道の爲に入りてくる事が出来る。此點に於て從來の他の人々の脱宗とは趣を異にして居る。故に無我愛に入る他の人も必ずしも君と同じく脱宗せねばならぬと云ふことはない。宗派の方でもあまりこせく言はぬ方がよい。

併世人の了解せぬことは當然のことであつて、信仰なき世の中に信仰的行動をなすときは了解せられぬのである。了解せられぬだけ夫だけ警醒の功力もある次第である。序ながら、君が主張につきて鄙見を陳べなば、君は宇宙の本體が無我愛であると言はれる、實驗の境としては確かに解かる。

予は實驗に入りたる時、佛は慈悲の塊であると知つた。其當時は唯慈悲々々といふことばかりであつた。念佛も極樂も左程にはおもはなんだが、味ふべき時節がくれば、古聖賢の言通りに味はれる。信仰は一念に絶對に入るものなれども其内容は漸次あらはれてくる。又慈悲の塊といふ言葉を実験なしにさくならば、或個体のごとく考へらるゝごとく、君の宇宙の本體といふ言が如何にも哲學の汎神の原理のごとく誤解され安いのである。其點は寧ろ親切に説明してやつて特に田舎信者などにいらざる驚を與へぬ様にしてやつた方がよからうかとおもふ、殊に佛敎の佛も基督敎の神も同様であるといふことは實驗の味が似て居るところより、あまり速断した

滿腔の涙を注ぎたる故ならん。此點に於ては遺憾なく、社會制度の不完全を痛撃したるものと謂つべし。されど之を救ふには内心の實驗なくんば、大平和を求すことかたし。されば其解脱の實驗を描くに至りても猶力ある復活を見たきものなり。聊か望蜀の感を叙す。

修養と研究(井別堂發行)

前田慧雲著

こは平素修養に心掛くる方法と、佛敎の歴史的研究とを輯めたるものにして、前田博士の最も長所を發揮したる著書である。博士の人格の濃厚なる、たしかに多年修養の工夫より來りたるものである、全体博士は信仰家といふよりも、修養家といふ方が適切である、頗る宋儒の趣を存して居らるゝ。其修養の工夫の如き天地自然に對する趣味を初めとして詩書畫の風雅を味ひ、起居動作の末に至るまで、大に修養に心かけらるゝ跡が明らかに見える。古雪籬前談、楓林茗話の如き大に此點があらはれてある。又研究に至りては、博士の最も得意なる、歴史的研究を辿りて、親切に示されたるものにして、之によりて非常なる利益を得ることが出来る。

讀大乘經典法、兜率往生思想發生時代考、叡山慧心流の解釋法と吾高祖大師の解釋法等最も吾人をして裨益する所が多

50(畢)

徳とは如何なるものなりやと云へば、徳は得なりと申して、物を身に得て之を以て人を益することなり。換言すれば、其の執る所に忠實なる之を徳となす、忠實の極、竟にその事その物と一致融合して、絶對不二の域に達す、之を三昧發得と謂ふ即ち所謂悟道なり。『修養と研究』

ものではなからうか。吾人もオーガスチンやルターを十分理解することか出来るが、だからといふて佛も神も同一であるとは言へない。是も宗派我を破壊する手段ではあるかもしれぬが、信仰としては畢竟自己の實驗を以て古聖賢を理解することが出来るといふまでのことである。

故に予の望むところは一意無我愛の實驗を宣傳することに力を注ぎて夫れ已上の論斷は熟考せられんことである。されど其實験自身の宣傳は實に有力にして無我愛の誕生未だ年を経ざるに既に社會に大なる感化を及ぼせるを見て、歡喜に堪へないのである。特に社會主義の物質平等に對して精神的平等を主張せる點に於て大に光明を發輝せるは大に多とする所である。

今後益々、實驗を深めて健全なる發達を祈る。

良人の自白中編(山分社發兌)

木下尚江著

社會制度の弊害を遺憾なく描き且つ内心の煩悶、外界の衝突を限なく寫して一讀の下人をして悲惨の情に堪へざらしむ。著者はたしかに小説を以て其主義を宣傳するに巧なる人なり。此書中に描ける煩悶は頗る極端なるものにして餘程大なる實驗を経るにあらざれば大平安の境を開き來ること難し。實は上巻も下巻も熟讀したるにあらざるも下巻に於て天地の靈をみたるの一節だけ讀みたるに、信仰の實驗としては、頗る力なき様に覺えたり。

されど全体に於て通常の小説のごとく空想を以て構成したるもとは、大に其趣を異にし生色あり、光彩あるは畢竟著者

嘆 咏

千本銀杏

左 千 夫

初冬その日の日影飾なる入幡の社に詣つ

夕空のかきらふ色を面白み八幡の市を森さしてゆ

刈込の楨の生垣或る家に庭に火をたく人等居る見

市と云へど家居まばらに黄昏をゆく人もなく森の上の星

田舎屋の南天垣の實を並めし赤けに目につくたを
かたにして

久方の空のほひのうるはしく里ら入らに日は暮れんとす

かさろひの日くれ朝あけかくしつゝ幾世か経たる神のみ郷は

灯のある家灯の無き家を見つゝゆき全け暮れぬ森のあたりに

左手をかへりみすれば西明り社の森のそらに匂へり

松蔭に葉うつ人はほのくらく女なるらし石の上に打つ

ほのくらく松の並木の深並木常敷石を踏み入る人あり

廣前は梢あかるけくみ宮代やつきの建物もほに知るべし

宮をかこふ大きな銀杏は夕空の明りに映ておほにかづよふ

祖父の椅子

甲

之

夕とざす戸を叩く人
やがて車のさしる音。
何そも、箱を積み来る。
たまたま風の荒るる夜
亡祖父の椅子を古る里より
送りこしけり。これに倚り
ともし火の下書に對す。
今日は過くれど知らず明日
はかなき命長らへて
やすやす生けり今宵まで。

胸の戸開き人にゆるす
心なかりし徳川家康
幕府を東都に開きてより
人の子孫は枝を刈り
幹を撓むる庭の木に
擇ばざりけり。其末に
世はあらたまり治まれど
心の誠たどらむと

行く道のべに劔執り
畏待ふせて魔は立てり。

祖先を思へば人間は
悲しむべく、水の泡

消ゆるべく世に生れ死に
あらし吹きゆるさ夜中に
せめて貧しきいろりべを
圍むやからと語らふを
命と思へ。吾を愛てし
人思はずば佛も幸無し。

今はみ暮る冬の日
照る間短かく山裾野
目に見るものも無かるらむ

思へば悲し祖先の恩。
手を動かせば愛の綱
手末まつはり、言葉皆
苦をまく種と變るなり。

せめては祖父が椅子に倚り
思ひ悲しみ愛ひ忘れむ。

異芳三章

自然

入

風

我れ夢に、大なる地下の廣間に、ありき。天井高さ、此の廣間を充たしたる光は、此の世の光にして、又地下の光なりき。

廣間の中央には、積多き緑の衣服を纏ひて、れごそかに、一人の女性坐したり。其の頭を片手に支へて、彼女は、深き思ひに、沈めるめり。

我れは、やがて其の「自然」なるを知りて、畏敬の念に襲はれ、急激なる寒氣の、骨に徹するが如きをぞ覺えし。

我は、此の女性に近づき、低く首を垂れて禮したる後、叫びぬ。

「嗚呼、汝、吾等總ての母、何をか考へ給へる。人類の未來の運命をや、あるは、如何にせば、彼等人類が完全無缺に至るへさか、如何にせば、彼等は無上の幸を享くへさかをや、思ひめぐらし給へる。」

靜に女性は、其の曇れる、恐ろしき眼を、我に向けぬ。其の唇は動きぬ——我は鐵蹄の響の如き聲の、到徹するを感じつ。

「我は、如何に、「喜」の其の脚の筋肉に、大なる力より、力を得て、能く身を容易く、其の敵より救ふかを、思ひめぐらすになむ。抗撃と防衛とは、其の平衡を破られたり。其は再

「回復せらるべきにこそ。」
 「如何で、かゝる事をば考へ給へる。吾れ等人類は、汝が愛兒にはあらずや」と、口ごもりつゝ云ひぬ。
 女性はその顔を皺めぬ。「一切創造は我が子なり。我れ彼等總てに心を用ゐると、露異ならずかし。總ての我に滅さるべきも、亦全く同じじきなりけり。」

「されど善、……理性、……正義、」我はまた訥りぬ。
 執拗なる聲は答へぬ、「其は人間の言葉にこそあれ。我は善を知らず、亦悪を知らず……我が理性は、我か法にあらず……正義何ぞや……我れ汝に生を與へたり、我れ之を汝に奪ひて、他に與へんとすなり、蟲も人も……汝其時の至るまで身を守れ、我をな惱ましそ。」

我はなほ何かを答へんと思ひつゝ、されど、周圍の大地は呻き初め、震ひ初めたり——終に我は覺めてけり。

最後の再會

かつては吾等はいたく相結べる友なりけるを……不幸なる時は來りぬ——吾等は仇敵の如く別れたり。

幾多の歲月は消え去りつゝ……我は彼が住へる市街を過ぎて、其の絶望に陥りて、我を見て願へるを、知りぬ。

我は彼を訪れて、其室に入りぬ。吾等は目と目を見あはしぬ。

我は彼をば殆ど得認めず。あはれ病魔は彼を何とかはする。瘡せて黄色になりつゝ、頭には冠れるものなく、鬚は少く灰色となりて、彼は其所に坐したり。身は只一枚の、殊更に彼

圍は深き沈黙の中に在れど、已に早き曙を示しぬ。輕き空氣は鋭き、濕れる露の香を瀰蔓せしむるなり。

遽しく、開きたる窓より、輕き音して一羽の大なる鳥は、我へと室内に飛ひ入りぬ。

驚きて見れば——其は鳥にはあらず、密着して長く垂れたる衣服をまとへる、羽翼ある小さき女なりけり。

彼は全く灰色にて——眞珠の如き灰色——只翼の内面のみ、咲ける薔薇の美はしき紅をあらはす。コンバラリヤの冠は圓き頭の亂れ髪にまとへり。美はしき卵形の額には、胡蝶の觸角の如く、二枚の孔雀の羽あかしげにふるへり。

彼は五六度室内を飛びまはりぬ、其の小さき顔はほゝえみぬ、大なる黒き眼もまたほゝえみぬ。弱き翼は喜はしげに飛びまはりて、其の金剛石に似たる光は稍失せつ。

彼は野草の花の長き莖を手をせり。露人は之を帝の杖とぞ云ふなる——實に杖に異ならず。

我が上を、速に飛ひつゝ、彼は其の花もて我か頭にふるゝなりけり。

我は兩手を彼が方へ伸ばしぬ。されど彼は已に窓の外に驪り出てたり。彼は再び其所より飛ふなり。

圓なる接骨木の蔭にて、一羽の鳩は彼を知りぬ——彼等の遠く去りて、見えざるところ、牛乳の如き白き天は、やゝに赤くなり初めぬ。

我は認めたり、想像の女神を。思はずも女神は我に來れり

其の途上若き詩人に。

あゝ詩、青春、婦人の美、少女の美、瞬間にして汝は我か生涯に光を與ふるなり——初春の曙に。

が爲に裁ちたる襦衣を纏へるのみ。この輕き衣服の重さに、得堪えぬ様なり。遽しく彼は其の恐ろしきまで細き手を、我に差し延へ、物憂げに、解しがたき言葉をつぶやきぬ。其を歓迎なり、其を拒絶なりと、誰かは云ひえむ。

火の如き眼の、瞳子をば、二つの小さき、痛ましげに燃ゆる涙滴は轉び落ちぬ。

我が胸は苦しくなりつゝ、我は彼の側に坐しぬ——見るとしもなく、自ら眼をこのすさまじき姿に向けて、手を彼に與へり。

されど我には宛ら彼の手は我か手を掴まざるが如かりけり。
 我は覺えぬ、吾等か間には、尊き無言の白き姿の坐せるを。長き衣は、頭より足まで彼の全身を覆ひかくして、深き白き眼は、空虚を眺めぬ。只一聲だに白く固き唇より出づるはなかりき。

此の姿は吾等の手を互に取らしめ、吾等を長へに和せしめたり。

實に……死は我等を和せしめたりけり。

春の曙

我は開きて窓に近く坐したりけり……朝まだきさき月一日の朝まだき。

東の空未だ紅の色も映えざれど、ほのくくと白みたり。暗き暖なる夜は已に涼しくなりをめつ。

霞未だ立たず、風もなく、何所も同じ色にぞ見えし。四

時報

歳末之辭

◎前橋師範學校講話 ◎沼津中學校講話

鳥兔匆匆として流るゝが如く明治三十八年亦將さに旬日にして暮れむとす。而して吾人亦茲に求道第二卷最終號を編するの時に至れり。今や編輯既になりて筆を擱かむとするに感自ら新にして禁じ難し。即ち所懐の一端を録して以て歳末の辭に代へむと欲す。

吾人の劈頭最も感謝に耐えざるは佛天の冥祐雍々として吾人が凡ての上に光被し給ふの事實也。顧みるに吾人一昨年正月より雜誌政教時報を改題して茲に本誌を發行してより正さに二星霜、其間時に多々の變更無きにしもあらず、又吾人の微力なる未だ充分の經營を全うし得たりと信するにもあらず。

而かも幸なる哉吾人は自ら期せざるに全國幾多同情者諸君の熱誠なる贊助を忝うし、自ら計らざるに各地到る所切實なる求道者諸君の興望に添ふ事を得たり。而して吾人當初の所願は今や漸く其幾分を實現せむとするに庶幾からむか。是れ實に吾人の以て意外とする所、洵に佛陀冥々の裡に吾人を誘導して吾人をして過たしめず自ら行くべきの道に趣かしめ給ひたるものにあらずして何ぞ、而して一面求道學舎第一第二

求道會の狀況を見るに是れ亦佛陀引入の加護を被つて眞摯道を求むる幾多青年男女諸君の來集あり、或は熱烈心血を吐露

して慘憺たる苦悶を披瀝せらるゝあり、或は満身感謝の涙に潤つて慈懷攝取の光益を讚稱せらるゝあり、之を世に比して其數甚多しと謂ふ可らざるも眞實得信の士は日に漸く多からむとす。斯くの如くにして吾人茲に一歳を終はらむとし讀者諸君と共に大慈光の攝護を仰ぎつゝ、將に光榮ある新年を迎へんとす。吾人は佛陀の矜哀に至らざるなきを思つて殆んど感謝の辭を知らざる也。

而して一方我國民人心の状態や如何。吾人の信する所を言はしめば我が國民、今や亦佛陀悲體の戒雷に催うされて漸く自覺の行程に登らむとせるものゝ如し、昨春より繼續せられし日露の戦役は我國民全般に亘りて如何の經驗を與へたりとす。殆ど吾人は之によりて人生有らゆる苦闘の試練を嘗め盡し人力の極所を自知し得たりと謂つ可し。而して吾人は戦役の終結と共に再び内に顧みて自己内面の破綻を整頓すべきの時に臨み吾人國民の第一に發見したる缺陷は實に精神的地盤の不安にあらざりしか。吾人は恐る若し我が國民にして、今の時に際し終に宗教的自覺に樹つ能はずんば、過古二年間全國幾十萬の生血を絞つたる大戦役も畢竟は無意義に了らむ事を。然りと雖も退いて全國五千萬同胞の胸中を測度するに今や内心の苦悶極まりて信仰の饑渴殆んど其極所に達せるを見る。嗚呼吾人同胞は實に此般戦役の慘禍によりて遺憾なく攪亂し盡されたり。吾人が同胞の中或は最愛の父子を失うて孤獨頼みなきを嘆るの老幼あらむ、或は最愛の夫に別れて悲泣衣を乾すに暇なき妻女あらむ。吾人も亦最親の從弟此役に殉じて斷腸極なしと雖、幸に彼が爲すべき任務を全ふじ満足微

笑念佛しつゝ、瞑目せるを聞き、佛陀無限の矜意に泣くもの、翻て吾人可憐の同胞を思ふ、此等幾多の懊惱幾多の苦悶は將に何物に依つて最後の安慰に達するを得べきか。吾人は茲に至つて言ふ所を知らず、唯佛陀無邊の弘哀益其偉大なるを歎ずると共に、吾人の當さに盡すべきの業増々擴大せるを感ずるのみ。而して更に進みて大悲引入の善巧を思ふに是れ亦凡て大慈光明の一顯現たるなからんや。宜なる哉此の一年の間都門計らざるの邊に於て意外の實驗の陸續現出し來りし事や、吾人は寧ろ地上の萬物有情と非情を問はず、今や靡然として信仰の門に傾倒せむとするを感ぜずんばあらざるなり。

吾人が本誌を編するの方針は既に讀者諸君の知悉せらるゝ所吾人は敢て一毫の私意を加へず唯吾人の得たる實驗を當面より直寫して讀者諸君の同感に訴ふるのみ。而して本年に入りてよりは更に幾分の刷新を加へ専ら親鸞聖人の信仰を讚仰し奉るに盡しぬ。然れ共時勢の推移は多少の變更を促すものあり、吾人が明春を以て更に一面の改良を施さむと期するは本號社説欄に附記したるが如し、尙ほ他に諸君の寛恕を請うべきの一事あり。吾人は本誌の經營に能ふ限りの時間と努力を用ゐたりと信ずると雖、如何せん、吾人の微力は、實に連月の發行遅延と、時々之の休刊と、及び發達の遲滞とを餘儀なくせしめたり。吾人は愛讀者各位が如何に本誌の爲めに多大の同情を寄せ給はるかを知る。之を知るが故に彌々慚愧身を燒くを覺ゆるなり。吾人は向後に於て吾人の出來うる限り此等の失態を再びせざらん事を期す。

今や歳の暮れむとするに際し、一言所懐を述する事斯の如し。記し了りて筆を投ぜんとすれば窓外寒月影鮮かにして滿天の霜氣頻りに身を襲ふ。

前橋師範學校講話 沼津中學校講話

本月二日前橋師範學校學藝部の招聘に應じて近角は前夜同地に着し、羽田師範學校長、岡中學校長、及び求道學舎に居られし師範教授今井正親君、同和學園に居られし中學教授小笠原實成君及學藝部員の温き迎を受け、同夜直ちに中學校に於て寄宿生の爲に一場の談話を爲し、歐洲各國國民の氣風を比較して英國民の眞摯確實なる最も則るべきを述べ、同夜は今井小笠原兩君の寓に宿し、中心の款待を享け懷舊の情を披き、翌日午前師範學校に趣き、校長の導きによりて審かに授業を參觀し、午後講堂に於て學藝部大會を開けり、部長今井君の開會の辭に次ぎて近角は一時間半、個人の自覺國民の自覺に つきて演説せり自己か學生時代よりの内心の經過を飾りなく披瀝して信仰の實驗を詳説し、戦後國民か自覺の時機たるへきを論ぜり、次に同地出身の栗原中尉旅順閉塞隊及日本海々戦の實況につき痛快なる談話あり、夜に入り前記諸氏に加ふるに、かねて求道を受讀して慈光に接せられたる八田氏及群馬新聞の吉田磯氏等の丁寧なる見送を受け同地を出發せり、恰も月明かにして田野清らかなり車窓孤坐聖教を繙きつゝ佛恩を感謝しつゝ、猶諸氏と語るの想をなして歸る、

沼津中學校長落合寅平氏はかねて故清澤滿之師の爲人を慕

ひ、稻葉昌九師に遇ひて沼津に於ける近時信仰の勃興につきて叙せられしかば、稻葉師は書を寄せて必ず第二の羽村を生ずべければ往來のとき立寄らばよからんと申越されたり、近角此度從兄の遺骨到着せるを以て之に會葬せんために本月十日歸省し、上京の途次十八日夜同地に着せしに當日曉鳥君亦立寄りて沼津説教場に於て講話ありて、公衆退散の後なりき、乃ち直に之に赴き、有志諸氏と共に爐畔に團欒して信仰を話し夜四更に到り、翌日曉鳥君と共に中學校に赴き各一場の講話を試み、曉鳥君は歸京し予は説教場に於て二席の法話を爲し、信仰は人生に於ける實驗によりて彌陀の慈光に攝取せらるゝものなることを説きて嘆異鈔の要所々々につきて鑽仰し奉れり、同地の信仰上の集合は日猶淺きにも拘はらず、僧俗諸氏の熱心なると期せずして特志の人々集り來れるさま不可思議といふの外なし、此等の人々及び醫科大學出身の莊野熊五郎氏千葉醫學專門學校の出身の柳澤文三郎氏の見送を受け車窓に凭りてブラットホームに立てる諸氏と相語るの時、猶一言一句互に信仰の披瀝たらざるなし、一見舊知の如く眞個にこれ御同朋御同行の實現と謂つべし、

女子信仰談話會 信仰談話會

- 不可思議の信(十一月十九日)
 - 長者鴉子(十一月二十六日)
 - 深く自ら悔責せよ(十二月三日)
 - 感謝と懺悔(十二月十日)
- ▲第二求道會講話題
眞愚は智なり(十一月十八日)

加藤咄堂先生著

通俗佛敎要義

特價發賣一月卅一日迄金一圓十錢●郵送本費金十五錢●
 全一冊總クロス總美本●紙數五百頁▲定價金一圓卅五錢●
 ●郵税金十五錢

組織的佛敎の根本原理を示し宇宙人生に對する所説より信
 仰の對道德の綱要に至るまで説文章平易何人
 解し易き空前初版旬日にし賣り切れ再版す
 の大著なり

帝國大學講師エ、ロイド先生序●忽滑谷快天先生著

怪傑マホメツ

全一冊搜書美本●定價五十錢●郵税金八錢●紙數二百三十頁
 高風一世を化するの聖人か雄姿三軍を動かすの英雄か世界二
 大宗敎の一たる回教の教祖マホメツは實に千古の怪傑たり
 本書多年彼が研究に潜心せられたる著者が流麗典雅の筆を以
 て日常の起居動靜より回天動地の偉業に至るまで微に入り細
 を穿ち其眞面目を發揮し釋迦基督以外の此一偉人をして紙
 上に活躍せしめられたる空前の大著なり

東京橋本 山中孝之助 寶捌大阪南本町積文社東
 地二丁目 同森江 麻布飯食森江 京神田東京堂●同金昌堂
 ●本郷東亞堂●中橋廣小路前川●名古屋本町川瀬代助●見本
 南傳馬町目黒●中橋廣小路前川●名古屋本町川瀬代助●見本
 入用の方は郵券二錢御送りあり

◀ 行發日壹月壹年明 ▶

無盡燈

第拾壹卷第一號

定價部拾錢——半五年拾錢——壹年壹圓——郵不稅要

宗敎及哲學之研究

心及靈之指針

研究には自由を以て、智見を開き、修養には他力を以て、
 心靈を養は、大抱負を以て、生本誌の勢を以て、十星霜
 を進み來れ、大光の眞江湖の擁護とに依る、鳴謝して惜かざ
 り、これ全く

目 要

- ◎安心決定鈔の研究……………中島 覺亮
- ◎親鸞聖人の文字に就て……………近角 常觀
- ◎道德の審美觀……………吉田 靜致
- ◎靈界小觀……………諸 同人
- ◎傳大士の宗義……………上杉 文秀
- ◎附錄 梵文法華經和譯……………南條 文雄
- ◎種子と第八識との關係……………記 齋藤 唯信
- ◎大乘入楞伽經の羅婆那王……………佐々木 月樵
- ◎先德餘香……………南條 文雄
- ◎華嚴列祖の淨土敎……………河野 法雲
- ◎希臘哲學と東洋思想……………朝永 三十郎

定價同前紙數貳倍

今や學生墮落の聲は即ち學生と宗教とを起さしめぬ玆
 に吾人は精査し以て有識の讀者諸君を驚さしめぬ玆
 本問題を精査し以て有識の讀者諸君を驚さしめぬ玆
 振な時論と相照らさば錦上に花を飾るの觀な乞ふ之を
 待て!!

發行所 東京府下野眞宗大學内 無盡燈社

訂正

前號廣告欄第一面「修養と研究」上宮太子實錄」
 の發行所中山孝之助は山中孝之助の誤に付右訂
 正す

文學博士 南條文雄先生序
 文學士 本多辰次郎先生著

近世高僧逸傳

新刊

定價一冊 金貳拾錢 郵稅貳錢

我邦千有餘年間、名敎の維持者となり、文明の誘掖者となり、
 政治、敎育、文學、美術等凡百の事物殆ど皆其關輪を握りた
 るものは、これ佛者の力にあらざるや。而して此等の高僧碩徳の
 事跡湮滅して世に傳はらざるもの多し。古昔は論するまでも
 なく、徳川氏以後即ち近世に於ける諸大徳の事跡をも之を釋
 ぬるに、香として史に知るに由なし。彼の儒士に關しては先
 哲叢談、先哲像傳等夥多の載籍之を傳ふる詳かなりと雖、獨
 り佛者の言行の世に傳はらざるは、當に先徳諸師の爲めに惜
 むのみならず、後進敎育上の好材料を埋没せしむるものにし
 て、昭代の恨事之に過ぎずと云ふべし。

佛敎史に精通せる本多先生此に見る所あり。多年の間苦心輯
 集の餘に成りたるもの本書是也。乃ち近世に於ける各宗五十
 有餘名の先徳諸師の美談言行を掲げ來りて、餘香芬として紙
 上に溢れ、一人をして百花園裡に逍遙せしむる感あらしむ。
 偉人傑士の一言一行は儒夫をして感奮興起せしむるの大なる
 ことは、今更ららばいふの要なし。希くは修養上の良師として本
 書を座右に備へられんことを望む。

發賣所

東京麻布 飯倉町五

森江本店

近角常觀著

信仰之餘瀝

第七版

定價 上製 貳拾錢 並製 拾五錢 郵稅貳錢

發行所 東京市本郷區 四丁目五番地 文 明 堂

賣捌所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

文學士 常盤天定纂

佛陀之聖訓

訂正 四版

定價 上製 卅五錢 並製 廿三錢 郵稅四錢

(拾部已上ハ特別減價一割引ノ上郵稅ヲ負擔ス)

發行所 東京市小石川區 白山町三十一 無我山房

取次所 東京市本郷區 森川町一番地 求道發行所

本誌編輯員 加藤鼎堂 田中我觀 高島米峯 古川流泉 境野黃洋 杉村縱橫

新佛教

第七卷第壹號一月一號發行要目

- 明治三十八年佛教小史
- 宗教と倫理との關係
- 感情主義
- 談片一則
- 九分教と十二分教
- 業報と救濟
- 時感數則
- 後家物語
- 處生と修養
- 苦學生に警告す
- 安心立命論
- 興國の精神
- ある夜
- マホメット論
- 國光と救濟事業
- 叙山三日
- 回顧二則
- 古典研究と新研究
- 學究瑣言
- 佛教の活動
- 第六卷總目錄及扉
- 東京駒込 新佛教徒會
- 東京小石川原町六 鷄聲堂

定價郵稅共 一部拾壹錢 半年拾五錢 全年貳拾五錢 也

宗教界唯一の 中外日報

一ヶ月僅に貳拾錢(外に郵稅十二錢) 半ケ年間郵稅共壹圓九拾錢 一ケ年間郵稅共參圓六拾錢

創業第拾年に入る

一月一紙幅と世間新聞大(三十頁)に擴

最新式の印刷器械と備付電氣力と應用し敏腕記者數名と東西二都に配置し 清韓米布及び内國各地に通信員と特置し教界の時事と細大報道論評す

京都、栗田口三條上ル

中外日報社

(特電 九百八拾九番)

規定

- 一、本誌は毎月一回(一日)發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべ
- 一、く、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一冊
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

- 廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢
- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治三十八年十一月廿七日印刷 明治三十八年十二月一日發行

發行兼編輯人 百目木智 印刷人 白土幸力

發行所 東京市本郷區森川町一番地 求道發行所 (電話下谷二四三二)

大賣捌所 東京市神田區神保町 東 京 堂 同 本郷四丁目 文 明 堂

前號要目

求道

◎佛陀は光明也壽命也

▲親鸞聖人光明本之圖

◎十二光の賦

講話

◎國民性と信仰

◎捨身求法

◎信仰と秋稷

實験

◎余が信仰の現状

◎佛の慈悲を感謝す

近角常觀

近角常觀

近角常觀

渡邊知空

宇野順

▲消息二章

雜錄

◎燈火爐火

◎奉天通信

歎歌

◎孤獨の歎(短歌)

◎百花園(同上)

◎詠雲八首(同上)

時報

靜觀

葛原運次郎

左千夫

甲之

八風

◎信仰談話會の昨今◎寺本婉雅師の入藏實験談
◎求道學舎第二第三求道會講話題